

弥生時代における北陸西部と下越地方の交流

久田 正弘（石川県埋蔵文化財センター）

はじめに

ご紹介に預かりました石川県埋蔵文化財センターの久田といいます。今回、レジュメは話しの流れとして、基本的にはパワーポイントで画像を見て頂き、その内容を話していきたいと思います。

1. 石器の流通

石川県というのは、左手挙げて人差し指を少し曲げて、親指を広げた形で表現します。親指が富山県、能登半島が人さし指となります。石川県は能登地方と加賀地方で地形・地質が大きく異なり、スライド2が地質図ですが、岩体が意外と違います。能登の方は青・紫色が多く、加賀地方はピンク色などが多いなどの違いがあります。スライドの星印は縄文時代の剥片石器の石材が採れる産地です。能登半島では、新潟や佐渡と近い石器の石材が出土しているので、ある程度地質的には近いと思います。ただ大きく違うのは、旧富来町、現在合併して志賀町ですが、そこには輝石安山岩が採れます。それは西日本（二上山や四国）のサヌカイトに近いような石材です。この石材が利用されることが、新潟県と大きく違う状況だと思えます。輝石安山岩の石器は、スライド2の黒印で出土し、かなり多く分布しています。土器圏のまともりは、能登と富山が1つの分布圏、能登と金沢が1つの分布圏としてあるのですが、加賀地方では手取川という大きな川があるので、能登・金沢とは違う状況です。

スライド3が縄文時代の石材流通のイメージですが、富山市小竹貝塚では色々な産地から色々な石材が来ています。スライド3の石器では赤や白や黒や黄色があるのは、明後日から展示が始まる新潟市御井戸遺跡でも殆ど変わりません。それは、縄文時代の石材の流通は、1つの産地に頼るのではなくて、色々な所から石材や製品が集まって来ます。スライド3は黒色の石器が目立ちますが、色々な色の石材が少しずつあるというのが、縄文時代の石器です。

弥生時代では、石川県小松市八日市地方遺跡では沢山の遺物が出土しています。スライド4は石鏃の

集合写真です。スライド3に比べて色々な色もありますが、基本的には黒色で統一されます。それは、能登の輝石安山岩やサヌカイトや他地域の安山岩が入っているからですが、写真スライド4の赤囲みに3点の黒曜石があります。透明な石鏃は長野県霧ヶ峰産と思いますが、下の黒い石鏃は、九州の黒曜石であり、縄文時代に来ていると私は思っています。

近年、輪島市塚田遺跡で縄文時代に磨製石器を作っていることが判りました（スライド5）。能登地方では、糸魚川の蛇紋岩製磨製石斧が一番多く出土していましたが、縄文時代後期中頃以降になると、スライド5の石材の磨製石斧が出土します。これを探していくと、米原市起し又遺跡で出土しているのを確認しました（スライド5左）。実は昨日、御井戸遺跡の展示準備を見学した際に、私が石川県内などで見た石材と、多分同じものがありました。それは旧朝日村で作られた縄文時代後期中葉頃の石斧が、金沢か近畿には、ちょっと記憶が定かじゃないのですが出土しています。つまり、土器だけじゃなくて石器の石材を調べることで広域流通が判ることが、現在言われております。

2. 土器・土製品の流通

私の出身は真脇遺跡の近くで、「お魚さん」土器がありまして、日本海側で分布しております（スライド6左）。福浦上層式土器の分布は、昔に秋田県の富樫さんが纏められましたのを図に落としました（スライド6右）。すると男鹿半島にぶつかって米代川沿いに登っていくと三内丸山遺跡に行った可能性があります。縄文時代前期終わり頃に、石川県の土器が、下越地方を越えて三内丸山遺跡まで行った可能性があるのです（スライド6右）。

スライド7は「の」字状石製品であり、南海種のイモガイの上を切った形の石製品です。本当はこの貝製品が欲しいのですが、それが手に入らないから真似をしたコピー商品が、石川・新潟・東北でも出土しています（スライド8）。

南海産のコピー製品は、村上市のホラガイの土製

品（後期中葉、スライド8中）、富山市北代遺跡（スライド8左）ではタカラガイの土製品が出土しています。模倣する際にはある程度現物が無いと無理ですが、東北地方でもイモガイ型土製品（スライド8右）が出土しているので、遠方の情報がしっかり伝わっています。

スライド9は、西日本で出土した北陸系土器の分布ですが、殆どの土器が関東系土器と言われていきます。北陸の新崎式は和歌山県新宮市や南九州の方にも出土しているので、広域に動いているのが判ります。それ以外に、スライド7・8の南海産のものが北陸に来ているので、何百kmも動いているようです（スライド9）。

3. 玉製品・祭祀具の流通

今までは土器の話ですが、今新潟県埋蔵文化財センターでヒスイの展示をしている中に、結晶片岩製の玉があります。九州地方で多く作られた玉であり、一番新しい玉が新発田市青田遺跡で出土しています。その九州の玉は縄文時代後期中葉から晩期前半ぐらいに、集中的に多く作られました。その石材はヒスイではなく、軟玉で深緑色の石を使い、円錐形、コの字勾玉があります。それが石川県の御経塚遺跡で4か5点出土しています（スライド10右）。この玉の事は熊本大学大坪志子氏がまとめられて、何回も発表しています。

九州の物が北陸に行くけど、実は北陸の物も西日本に動いているのです。出雲市三田谷遺跡には八日市新保式が出土しています（スライド11）。だから片方だけでなく双方向で交流が行われ、石川県金沢市藤江C遺跡でも九州の玉が出土しています（スライド11）。藤江C遺跡の他の玉はヒスイですが、ヒスイの玉と一緒に九州の玉が出土することが判ってきました。

スライド12は御物石器の分布図ですが御物石器とは、穴水町比良で出土したものが檀家から東本願寺に寄進され、本願寺から明治天皇に献上されたから、付いた名前です。飛驒型、北陸型に分かれていますし、2種類の石材があります。その中で、黒い石材は大分県竹田市で出土しています（スライド12左下）。もう1つ山を越えれば熊本県です。先ほどの九州の玉は、この中央構造体の所に産地があるので、その近くまで御物石器は行っております。

竹田市は黒色粘板岩質であり、多分飛驒で作られたと思いますが、加賀産の凝灰岩質は飛驒市家ノ下

遺跡でも出土し、石川県真脇遺跡では両方出土（スライド12）するので、一方から色々なものが来るのではなく、同じ地域内でも多方向からの流通がありそうです。

次に漆器ですが、富山県小矢部市桜町遺跡の櫛は、東北で作られた透かしが入った綺麗なもの（スライド13左下）で、同じような櫛が埼玉県や北海道で出土しています。ただし地元で作る櫛はスライド13左上の形なので、この透かしを持つ櫛は広域に動いていたと思われます。

4. 広域に移動した土器

スライド14は未報告資料ですが、真脇遺跡では大洞B1式土器が出土し、胎土も違います。明治大学の石川日出志氏に聞いたら、下越か中越だろうとのコメントを頂きました。新潟県の土器が、真脇遺跡までは来ていることが判りました。

西日本と東北地方の架け橋として上越市奥の城西峯遺跡があります（スライド15）。何で架け橋かと言うと、西日本系の突帯文土器、東海地方西部（愛知、岐阜県）の土器、富山県の土器（左下）、東北地方中部の土器（右）が出土しています。

スライド16は東大と奈良大の教授が書いた論文を元に、私が作図したのですが、高知県居徳遺跡に東北系土器が出土しており、弥生博などの展示に使われる土器ですが、同じ土器が石川県波並西の上遺跡や富山県桜町遺跡や福井県舟寄福島通遺跡、それ以外に、この奥の城西峯遺跡に出土しています。この両氏がある時に、「横浜市杉田遺跡にもあるが、高知へ行くにはどこを通過して行ったのかが判らない」と言われたような気がします。しかし、奥の城西峯遺跡を入れることによって、東北から関東に来て、高知まで行くルート以外に、上越から東海行って近畿から高知に行くルートも考えられます。この土器が大事なのは、福岡県雀居遺跡に出土し、遠賀川式土器の文様に影響を与えたと論じられました。今まで弥生時代というのは、文化は西から東しか行かないとずっと言われ続けていました。それが、この両氏の研究によって、相互交流もあることを提唱されたのが、今からもう12年ぐらい前のことです。

スライド17・18は見るだけで良いのですが、東日本系土器の分布域があります。弥生時代研究者は、「新潟県の大洞C2式朝日式は西日本に行っていないが、弥生時代前期になり始めた頃、沢山の土器が西日本に出土して、交流を盛んに行った」と言いたい

のですが、実は大洞C2式朝日式段階でも、それなりに交流はあるのです。ただそれを西日本の研究者がちょっと、図として表現していない。

その逆の例として、石川縣市御経塚遺跡、国指定史跡があります。そこには赤塗り、いわゆる丹塗磨研の壺、丹塗磨研の浅鉢が出土しています(スライド19)。中国地方には浅鉢変容壺というのがあり、本当は壺を作りたいのに壺を作る技術がないので、浅鉢の口縁を長くしたものが岡山地方あります。その浅鉢変容壺が御経塚遺跡で出土しています

スライド20では、同じような時期に、北部九州地方の夜白式底部と思われる土器や絵画か記号に近い土器(写真)が、縄文時代の終わり頃に出土しています。

御経塚遺跡では、晩期後半(新潟県では鳥屋式併行)の縄文土器の中に靱圧痕が確認されます(スライド21)。まだ時代的にも土器の作り方でも縄文時代なのですが、石川県まで稲は来ているのが判りました。

先ほど言った、夜白式・口酒井式の赤塗り土器は、実は石川県にも赤く塗った土器があります(スライド22左)。縄文土器の赤塗りというのは、土器を焼いてからベンガラを塗ってるので洗うと落ちますが、赤塗り土器は焼く前に塗っているので、洗っても赤色は落ちません。この技法が、奥の城西峯遺跡まで出土しています。

5. 弥生時代前期の土器の交流

弥生時代前期には遠賀川式壺の分布(スライド22右)は黒、赤、青色の3種類が産地のイメージとしてみてください。新潟では糸魚川市大塚遺跡は青色です。青色は、私の感覚ですと、出雲地方の混和剤に近いです。黒色は花崗岩地帯の土器であり、上越市和泉A遺跡は東海地方から来ていると思います。小松市八日市地方の壺は、出雲地方から直接来ていると見ております。その理由は、皆さんも色々な人と話していると、方言で出身地が判るように、土器の混和材を見れば作られた地域が大まかに判ります。

スライド23は東京大学設楽博己氏の論文を纏めたもので、島根県松江市西川津遺跡には、遠賀川式土器の壺なのに変な模様がある(スライド23左下)。楕円形の間に線を入れて眼鏡状にした文様があり、これは北陸的な文様です。これは北陸の土器(スライド23中下)が、鳥取県智頭枕田遺跡、鳥取県の入り口にある交通の要所の遺跡に搬入されており、胎土・

文様のにも北陸の土器ですが、北陸の文様を模倣した土器(スライド23中央右上)も出土しています。智頭枕田遺跡には瘤が付いた突帯文土器の壺があります。よって山陰地方で北陸の文様と突帯文の瘤が融合した壺(スライド23右上)が、石川県小松市八日市地方遺跡で出土したと私はみています。

それを可能にしたのが船でしょう。スライド24は輪島市舳倉島ですが、夏はアワビ採りの海女で有名ですが、そこの深湾洞遺跡に弥生時代前期に、遠賀川式土器ではなくて条痕文土器という縄文土器の伝統を持つ土器が出土しています。その中に一点、遠賀川式土器があるのが判りました(岩手大学佐藤由紀男氏教示、スライド24)。この報告書が出たのは1985年ですが、この土器の写真は報告されていません。2003年大阪文化弥生博物館の展示で、輪島市内から52km離れた離島に、弥生前期初頭以外の遺跡が無いのに、急に人が渡って生活した痕がある。そこに遠賀川式土器が出土しており、どこから来たのかが、今後課題になっています。それ以外に、舳倉島沖の底引き網であがった山陰系壺があります(スライド24右上)。これは山陰地方の古墳時代前期の土器ですが、難破したのか、それとも荒波にあったので荷物を海に投げたのか判りませんが、出土しています。深湾洞遺跡の近くにあるシラスナ遺跡には弥生時代後期から古墳と思われる鹿角の破片が出土しています(スライド24右下)。50km以上離れた島なので鹿は生息して居ないので、鹿角を持って行き、切った長い方で、アワビオコシか釣り針を作ったと思います。舳倉島は、今はアワビ漁で有名ですが江戸時代はアシカ漁が有名だったので、当時は海獣を獲りに行っていたと思います。

次に愛知県一宮市伝法寺野田遺跡に、浮線網状文(新潟県では鳥屋2式併行)という土器が出土しています(スライド25上)。報告書作成時に愛知県のセンター職員から「海綿骨針が入っている土器がある」と連絡がありました。愛知に行くと見ると、混和材の感じから七尾市周辺、和倉温泉よりは七尾城跡周辺から持って行ったのではないかと判断しました。それ以外に、三重県松阪市でも弥生時代後期終末の装飾器台(スライド25右)は混和材から野々市市から能美市周辺の土器と思われる。

弥生時代の中期になると櫛描文が多様になり、破片では細かい時期が判りにくくなりますが、前期の場合は縄文的な文様があるので、細かい時期が判ります。石川県の柴山出村式の中に、縦に一本線を引

いて両方に羽状の線を入れる文様が特徴の壺が、名古屋からしらさぎに乗って金沢に来るルートと、逆に富山から高山線に乗って行くルートに、意外と出土しています。新潟県では和泉A遺跡や保明浦遺跡にも出土していますので、ある程度交流があったと思われる。ただ、和泉A・保明浦・布尻遺跡の土器、高山市三枝城跡の土器は、似ているけど石川県のものではないことが判りました（スライド26）。

6. 弥生時代の石器の流通

小松市八日市地方遺跡では、弥生時代前期頃に北部九州地方の石斧と、北海道の石斧が出土しているのが報告されました（スライド27）。

北海道の石斧を報告した人は、青森・秋田ぐらいから、直接搬入されたのではないかと報告されました。ただ土器が伴わないので東北地方から直接なのか、新潟経由なのかも踏まえて、その時期の土器をもう一回洗い出して検討する必要があります。

先程北部九州から来た石斧を紹介しましたが、他に抉入柱状片刃石斧という石斧（スライド28）が出土しています。この石斧は北陸でも殆ど作っていません。出土する場合は完形品で未成品は無いので、直接持って来ているのだらうと思います。スライド28の石斧も、スライド29の石斧も黒い筋が少し見えると思います。斧柄には抉り部分で縛って使うのですが、縦筋が入る石材で作られています。出雲地方でも、同じような石材の石斧が出土しています。ただ、スライド29右下は同じような石材でないことや石材の色味が違うので多分近畿地方の石斧が来ていると見ております。

7. 石川県から新潟県に運ばれた土器

ここの展示室にある緒立遺跡の条痕文系壺（スライド30-1）ですが、小松市埋蔵文化財センター下濱貴子氏が、「あの土器は多分、八日市地方遺跡の土器だから、機会があったら確認して」と言われていました。混和材は同じ丸い粒子があると文様から小松市八日市地方遺跡から持ってきた土器と判断しました。見学の際に、スライド30-2を見せてもらうと海綿骨針が入っていました。胎土・文様的に新潟の土器と違うので、この土器は能登から運ばれたことを確認しました。

緒立遺跡はⅡ様式後半の管玉（スライド31）が展示してありますが、この管玉は孔が貫通していない未成品があります。これは穿孔途中で割れたものが

出土しています。集落の開始期ではなく、途中でそれが来ていることを評価していく必要があると思います。あとで話しますが、変な石錘があります（スライド31中央下）。

次は、新潟県に運ばれた北陸系櫛描文土器の話をしてします。旧亀田町西郷遺跡（スライド32左）の土器ですが、赤い鉄石英が入っており、在地で無いことが判りました。これ以外に、上越市吹上遺跡（スライド32中・右）では、集落の開始期に能登から運ばれた土器と南加賀か富山に運ばれた土器があることを混和材から確認しました。よって、新潟県の玉作り遺跡の集落開始期に、必ず北陸西部の土器、能登と加賀の土器が入っております。これは、今後重要になってくると思います。その理由は八日市地方と能登の土器が西郷遺跡や吹上遺跡まで出土しており、吹上遺跡では管玉を穿孔する石針の中に能登の安山岩があるのが蛍光X線で判明しています。だから小松・羽咋周辺の土器などが、新潟県に来ていることが判りました。上越市吹上遺跡（スライド34・35）の集落Ⅰ期に、能登などの土器などが来ていますし、あと銅鐸形土製品と石製品というのがあります。これは大阪湾型銅戈形土製品と長い名前なのですが、元の銅戈は大阪湾周辺で作られています（スライド35下段中央）。

8. 東日本系土器などの出土

スライド36は石川県・富山県で出土した東日本系土器の分布図ですが、2009年に私が纏めた時には色々な地域の土器が出土しています。この中で遺跡名が赤色は東北系、青色が中部・関東系ですが基本的に赤字が多いです。徳丸遺跡や飯野新屋遺跡などは、東南北部の二ツ釜式か川原町口式であり、下甘田遺跡は天王山式の前の型式と石川日出志氏から教示を得たのですが、私の中では判らない土器も出土しています。

9. 能登地方と新潟の関係

先ほど緒立遺跡の管玉では、薄い水色ですが、他に赤い鉄石英や深い緑色もあります。スライド37は七尾市細口源田山遺跡の方形周溝墓、その近くに千野遺跡（スライド38）があります。管玉や素材（スライド37・38）は薄い水色が多いので、七尾周辺では濃い緑色の石材が無いようです。スライド38右上に大きな変なやつ、珪化木が出土しています。珪化木は薄く剥いで、石鋸を作ります。石鋸は石材を割

るための溝を作る工具ですが、和歌山・徳島県で採れる紅簾石片岩製の石鋸も出土していますが、能登では珪化木が利用されているのは佐渡と同じか近いのです。

その理由を考えたら、志賀町（旧富来町）では、佐渡市平田遺跡などで作った管玉のセットが山王丸山遺跡で出土しています（スライド39）。他に、吹上遺跡で作られた滑石製勾玉が八幡バケモンザカ遺跡も出土しています。それ以外に、後に出てくる山陰系注口とか、色々な地方の遺物が出ているのが判っています（スライド39）。

山王丸山遺跡では佐渡の管玉が方形周溝墓の中央にある土坑からまとまって出土し、つなげると長さ3mぐらいになるネックレスになります（スライド40）。この遺跡にはヒスイ製勾玉もありますが、黒色は滑石製、白色は蛇紋岩製なので糸魚川市や上越市で作られた勾玉が出土しています。ですから志賀町（旧富来町）では、佐渡産の管玉を沢山入手し、上越・糸魚川周辺で作られた勾玉も出土するので、新潟県と交流があったことは確実です。

10. 能登の拠点集落の石器

羽咋市吉崎・次場遺跡は後ろに潟湖があったので拠点的な集落として残ったと思われる、一部が国指定史跡です（スライド42）。スライド43の石剣（1）は、弥生文化博物館の今回の図録に掲載されましたが朝鮮式磨製石剣と思っています。違ったとしても地元産ではないのです。2は銅剣型模倣石剣といって、銅剣が欲しいのですが銅は高いから無理なので、近畿地方北部から多分来た石剣と思われます。

吉崎・次場遺跡の玉作は、糸魚川からヒスイを入手して、濃い緑色の碧玉と言われる緑の石もあるのですが、管玉の石材産地は良く判りません（スライド44）。

玉以外に磨製石斧を作っています（スライド45）。石材は、柱状節理の素材を利用し、何種類かの石材を利用して作っています。過去の県調査では100点ぐらい素材があるようです。それ以外に新潟県でもよく出土する長野県善光寺平で作られた榎田型石斧が10数点出土します。つまり、自分達が使うから石斧を作るのですが、それ以外に吹上遺跡や新潟県内と同じように、長野産の石斧が沢山来ています。

吉崎・次場遺跡の北側に能登一の宮である気多大社があります（スライド46右上）。その北側にある大島から石材を9km離れた遺跡をまで運んで、磨製石

斧を製作していると林大智氏がまとめました。しかし現地に行くと、違う柱状節理の石材でしたが、石包丁と環状石斧を作っている石材でした。この石材は、黒い斑晶が特長なので加賀地方での出土も確認されています。逆に、羽咋市吉崎・次場では、南加賀、八日市地方遺跡などで使っている珪岩製の敲き石が出土しています（スライド47）。多分この石は佐渡でもあると思います。

11. 弥生時代中期の石器の流通

石川県内の石包丁・石斧の分布は、石材からみると、加賀地方と能登地方の石斧では、青色や黒色や赤色の出土事例があり、石川県の中で石材が動いていることが判りました。これは、図面でなく写真で石材を判断するとこのような交流があったことが判っています（スライド48）。

大阪文化博物館禰宜田館長が石川県に資料調査に来られた際に、吉崎・次場遺跡には二上山のサヌカイト製尖頭器を確認され、弥生博物館の図録に掲載されました。これ以外に小松市白江梯川遺跡にサヌカイト製の大きな打製有茎石鏃が出土しています（スライド49左2）。下呂温泉周辺には、昔はガラス質安山岩と言われ、今は下呂石と呼ばれる石鏃が出土しています（スライド49右下）。石川県には、近畿や下呂地方から来ているのが判ります。また、愛知県で有名な朝日遺跡で作られた土器が小松市八日市地方遺跡に持ちこまれています（スライド50の右）。

12. 鉄器の流通

八日市地方遺跡では、玉以外にも精巧な木製品を作っていました。精巧な木製品を作る為に、糸魚川の玉髓・蛇紋岩製の鑿状石器を使っていますが、それ以外に鉄製鉈を使っていたようです。鉈の1字でヤリガンナ（宮大工が使う道具）と読ませますが、本来はシと読みます。鉈の鉄部分は5.1cm、柄にはイヌガヤを図のように割って鉄を置いて桜皮の紐で巻いています。レントゲンにより、木を糸で巻いていることが判明しました。糸に接着剤が使われているのかは判りませんが、桜皮2本で巻いています（スライド51）。

八日市地方遺跡では、沢山の玉を作っています。スライド52の右側には、ものすごく綺麗なヒスイですが、すごく小さいのです。鉄製ヤリガンナの近くから糸が切れた状況で出土しました。手頸にしていたが紐が切れて、川の中に落としたようです。

スライド52の右上には変な斧の柄があり、鑄造鉄斧というソケット式の鉄斧用の柄です。この概要報告書は石川県埋蔵文化財センターのホームページでダウンロード可能なので、良かったら見てください。

スライド53の鑄造鉄斧は高田遺跡、鑄造鉄斧柄は八日市地方遺跡、板状鉄斧は吉崎・次場遺跡で出土したものです。鑄造鉄斧の柄が、弥生中期から後期にかけて、小松市で多く出土しています（スライド54）。その理由として、出雲地方との交流が強いからだと思います。

13. 西日本系の土器などの流通

スライド55には、変な形の底部や土器があり、出雲地方などから羽咋市に持ちこまれた（スライド55左下）、その影響がある土器（スライド55中央上）が確認されます。また、新潟市六地山遺跡（スライド55中下）では、私の観察では戸水B式の甕でした。Ⅳ様式最後の頃（天王山式土器ががいのかないの頃）に石川県の土器が出土しています。スライド55右中央は金沢市中屋サワ遺跡の魚の絵画土器ですが、これも山陰系の影響だと思えます。

スライド56の右下の土器は柏崎市開運橋遺跡から出土した九州系土器で、弥生時代後期（Ⅴ期）前半の土器です。実はこの土器は、新潟県内の土器よりも赤いのです。その前のⅣ期にもスライド56の中央下、加賀市三木A遺跡出土の赤く焼かれた土器があります。この土器にはタマキ貝の模様が施されています。山口県に關係する人に聞くと、山口県の土器は、赤く焼くものがあるようなので、北部九州や西部瀬戸内の土器が動いている中で、北部九州系土器が開運橋遺跡まで飛んで出土する以外に、その手前での出土もあるのでしょうか。

次に銅鐸形土製品という弥生時代中期の話をしませう。銅鐸形土製品が石川県羽咋市吉崎・次場遺跡と富山県小矢部市埴生南遺跡に出土しています（スライド57）。埴生南遺跡は写真でしか確認していません。

八日市地方遺跡は、銅鐸形土製品が6つ（スライド58・59）あるので、銅鐸は知っている、見ている、持って居たのかは不明なので、今後石川県でも出土すれば良いのですけれど。

次は、山口県や広島県や鳥取県に多く出土する分銅形土製品があります。いわゆる両替商のマークの分銅に近いので、分銅形土製品と名前が付いています。現在、石川県では44点以上確認されています（ス

ライド60）。出土地は、加賀市と小松市の川の流域、金沢市西側から白山市（旧松任市）と、羽咋市の沿岸部です。2002年の大阪府立弥生文化博物館の集計（スライド61右）では石川県は数点でしたが、現在は44点と沢山出土しています。ただし、近畿圏では少し、若狭地方にも1点だけなので、多分鳥取県などから直接来たといえようがない状況です。

次に、戸水B遺跡では滑石製指輪が出土していません（スライド62）。当時、金属性指輪もありましたが、これは形が歪なので貝製の指輪を模倣して作ったものと思います。スライド62中央下は身長150cm前半の女性の指に入れて撮影したものです。石製指輪は、長野県や四国地方でも多く出土していますが、北陸では少ないです。

北陸と長野の関係を纏めたのがスライド63です。薄紫色が長野の榎田型石斧、他の色が青銅関係のもので、分布などをみると八日市地方遺跡、吹上遺跡、柳沢遺跡などが各地域で色々交流をしているルート以外に、直接海を伝わったルートもあると思います。この中で面白いのが、この榎田型石斧で若狭地方と長浜市で出土していますが、栗林式土器は確認されません。若狭の場合は、どのルートで来たのかを解明出来ればと思っています。

14. 後期における土器などの交流

今回、八幡山弥生の丘展示館展示してある天王山式土器の北陸地方西部での分布（スライド64）ですが、その中で北海道系の恵山式土器が出土していることが、重要でしょう。最初の渡邊所長の挨拶にあったように、間は飛んでいます。能登半島の語源は色々言われていますが、ノット、突き出た岬というアイヌ語があるそうです。ノットがつかまればノットにもなるのです。突き出た岬、東から来ても西から来てもぶつかります。たまたま地元のラジオ局で、「日本列島ここが真ん中」という番組があるのですが、何で石川県が日本列島の真ん中なのと思っていました。だけど考古学では、最近使える言葉と思っています。天王山式土器は富山湾にも分布しながら、倶利伽羅から金沢へのルートや七尾周辺から羽咋周辺へのルートでも、ものすごく多く出土しています。赤丸印は、最近の事例です。

スライド64右の写真は、大きく見えますが、10cm程度の小さな甕です。今後、南加賀地方でも出土例が増えると思います。大阪府茨木市で、アメリカ型石鎌という天王山期の石鎌が出土しているので、天

王山式の人々が近畿まで行った事例もあります。

スライド65の土器は、現在八幡山弥生の丘展示館で展示中の石川県中能登町大槻3号墳に天王山式を模した壺が、後期前半のお墓に供献されています。これは昔の調査で、報告書は出てないのですが、再評価する必要から、渡邊所長が今回展示に借りてきました。ですから、展示を見て頂きたい。

北陸地方には、大阪の生駒西麓産壺が出土しています(スライド66)。特徴はチョコレート色の角閃石という黒色の鉱物がたくさん入っています。それが吉崎・次場遺跡と東の場タケノハナ遺跡では後期の壺(スライド66)が出土し、両遺跡は70mと近い距離にあり、共に中期の分銅形土製品が出土しています。あと氷見市大境洞窟(スライド66左下)や白山市野本遺跡(スライド66右上)で出土していますが、新潟でも出土して欲しいと思いますが、具体的に出土例があるのか私は判りません。

次は青銅器の鑄造の話をしてします。先ほど鉄器の話をしてしましたが、皆さんは青銅の製品と鉄の道具(鉄斧・鉄の工具)はどちらが高いと思いますか。鉄だと思える方举手をお願いします。じゃあ銅が高いと思われる方举手をお願いします。結果は銅が少し多いですね。奈良文化財研究所を退職された難波洋三氏が中国文献から金額を算定しますと銅製品のほうが鉄製品よりかなり高いそうです。ただ、銅製品よりもっと高いのは魏志倭人伝などに出てくる生口(セイコウ)、つまり奴隷が一番高いそうです。中国の歴史書では、倭国王等が160人、卑弥呼が40人の奴隷を献上したことが記録されています。当時中国でも人間が一番高かったのを、わざわざ持って来たので当時の皇帝は、倭人は金をかけており、皇帝に敬意を払っていると感じたでしょう。

15. 青銅器の生産

スライド67は後期前半の鑄造遺物ですが土製です。本来、北部九州では石製ですが、土で鑄型を作るのは近畿地方で発明された技術なので小松市一針B遺跡で土製が出土したことだけで、技術は近畿地方から来たことが判ります。ただし、鑄型などは出土しても、炉の構造が判らないのですが、変な焼けた土の塊(スライド67右下)がありました。炉の部材だと思いますが、どういう形になるのか判らないのが、一番のネックになっています。

吉崎・次場遺跡でも、鑄造関係の遺物(スライド68)が出ているので、能登と加賀地方では、とりあ

えず青銅器を作っていたことが判ります。あと、福井市高柳遺跡では銅鐸を破片にしたものが出土しているので、何かを作っていたようですが、どのぐらいの量をつくっていたのか判りません。

16. 山陰と北陸西部の関係

青谷上寺地遺跡は全国的に有名な遺跡で、昔人間の脳が出土したと新聞報道された遺跡です。実は弥生時代中期の終わりぐらいから、青谷上寺地遺跡と北陸地方西部との関係がものすごく強くなりました。それは、台が広口になる高杯(スライド69右)で、裾にタコ足みたいな突起が付いたものがあります。両者の形は似ていますが樹種(赤い字)が違います。ヤマグワとケヤキ、サクラと材料が違いますが同じようなものを作ろうとしています。青谷上寺地遺跡の高杯がオリジナルなのですが、木取りが報告書に入ってなかったのが私が確認すると、戸水B遺跡の高杯と透かしの割り付けが違うことが判りました。石川県ではオリジナルは知っているのでも憧れて作ってみたいけれど、材料と割り付けも違うことが、詳細に観察すると判ってきました。

青谷上寺地遺跡の周辺には、大きな岬があり、航海のランドマークになります。青谷上寺地遺跡は弥生時代中期から北陸の玉製品と小松で採れる玉の原石を輸入して自分達の所でも管玉を少し製作して、それを北部九州や佐賀県に運んで、利益をあげていたようです(スライド70)。いわゆる仲介貿易をしていたのですが、それが破綻したのです。青谷上寺地遺跡で管玉を作って輸出するのは、商売的には無理となったので、今度は木製品、花卉高杯というのを作り始めました。その高杯が北部九州と石川県で出土しています(スライド70右下)。

花卉高杯(6弁)は上下を別で作っていますが、杯部には変な取っ手が付いています。スライド71の中央右側はこれを模倣して作ったものです。この高杯は昭和54年、55年に石川県で2つ出土しました。青谷上寺地遺跡は2000年代に入ってから見つかったので石川県内の研究者は、「青谷上寺地遺跡の高杯は、石川で最初に作った?石川の高杯が行った?」などと言っていました。しかし、検討していくとやっぱり北陸のもので無いことが判りました。白江梯川遺跡の高杯(スライド71中央下)が出土した際に、うちの上司は「これ北陸で作ったものじゃないのか?」と言いましたが、それは無理ですと答えました。

スライド72は昭和54年金沢市西念・南新保遺跡から出土した高杯で、水銀朱が塗られ、口縁に黒漆が塗られています。内側中央に白っぽいもの（スライド77右下）が見えますが、別材を埋めているようです。古代中世の挽き物の木器には、中央に6本や色々な形の当て具痕跡があり、生地が動かないようにする工具があるので、その当て具の痕跡と見られておりました。

小松市白江梯川遺跡10次調査を私が担当しました（スライド73）。現在の集落の北と南側から、同じ遺跡と言っても良いような近隣した所から高杯が出土しています（スライド74）。きれいな加工がされていますが、保存処理する前の写真（スライド74右上）では中央部に黒いものがあり、木目の方向と違うことが判ります。保存処理を行うと、その黒いものが浮きでました（スライド74右下）。当て具痕であり、CTスキャンを行って、どのくらいの深さなのか、古代中世の挽き物の当て具痕の中心と違うのかを調べて行きたいと思います。

白江梯川遺跡と青谷上寺地遺跡では高杯以外に、同じものが確認されます（スライド75）。朱塗り容器の脚と言われる変な木製品があり、水銀朱が塗られ、下側に溝を持ち、上端に紐穴があるので他の物と合体させます。両者の樹種はイヌガヤと同じです。スライド75左下のカゴは青谷上寺地遺跡の出土品を復元したのですが、底に台が付いています。出土状態ではカゴの横から少し離れて、台の部材が出土していました。白江梯川遺跡では台が付いた状態（スライド75中央）で出土したことを受けて、青谷上寺地遺跡の復元品は台を付けて復元したようです。カゴは両遺跡とも同じなので、直接来たかは判りませんが、同じ技術、同じものを持っています。

次は、青谷上寺地遺跡から直接来たものがあります。これは2回目の紹介になるのですが、青谷上寺地には緑土を塗った楯があります（スライド81左）。この赤い色が水銀朱で、ここの緑色が緑土です。同じものが白江梯川遺跡にもありました。発見の経緯がおもしろいのです。青谷上寺地遺跡から、仕事を依頼されて伺った際に「日本初の緑土の楯を確認」と来週記者発表すると言われました。それを見せていただいた際に、「どっかであった」と思って、自分の職場に帰って見たら同じものがありました。ちょっと判りにくいですが、ここに少し薄い緑色（スライド81右側中央）があり、これが緑土です。鳥取県に電話かけたら、当時の所長が「今から新聞発表

するのでその話は聞かなかったことにする」と言われました。実は全国初というのを報道するときに、実はもう1個石川県にあったというのがばつが悪かったのでしょう。その後、鳥取県埋蔵文化センターで、復元し本を出しました。その復元チームは白江梯川遺跡の楯も見に来ました。その際に「そのものだね」って言って帰られて、一応分析もお願いしました。青谷上寺地遺跡では、保存処理の前の写真が無く、保存処理後には緑色も飛んじゃって判らないですけど、白江梯川遺跡では保存処理する前の写真もあるのが良かったと思っています。

スライド77は腰掛けですが、少し形は違いますが、出窓のような透かしが近いものが越前市で出土しており、色々なものが交流していると思われます。

17. 新潟県の木製品

今回集めてみて「えっ」と驚いたのが長岡市大武遺跡の木製品です。川から出土の資料なので評価は難しいのですが、この高杯と棍棒を見て、普通の遺跡じゃないと思いました（スライド77）。楯の出土は北陸西部では何てことないのですが、大武遺跡で杉の楯が2つあるのはちょっと驚きました。石川県では楯はよく出土し、富山県でも氷見市惣領浦之前遺跡に楯の未成品と水銀朱を塗った楯（スライド78）がありますが、富山県では楯は殆ど無いです。スライド79は青谷上寺地遺跡と白江梯川遺跡の楯ですが、取っ手がちょっと内側に向いているのが特徴なのですが、惣領浦之前内遺跡のもそうです。楯は、惣領浦之前遺跡で出土し、やっと能登半島を越えたと思ったのですが、そのうち上越市釜蓋遺跡（スライド79右）で出土したのでやっぱり上越も出るか！と思いました。長岡市大武遺跡まで出土が確認されました（スライド79中央下）。この楯は多分、石川か富山県、もっと飛ばせば山陰から持ってきている可能性があると思います。

スライドの表題のプラス新潟県というのは、実は今週追加した部分があります。スライド80右側の短剣柄2つは、樹種は違いますが剣を入れる縁や段があることや形のカーブが似ているのです。樹種はツバキ属とカヤで異なりますが、カヤは弓などにも使う硬い木なので、剣の柄にもすごく良いです。また、大武遺跡のモミ属の楯（スライド80右）も出ているので、朱が塗ってあったら、ものすごくすごいと言いたいのですが観察してないので判りません。楯は必ずモミ属で作ります。大武遺跡にはこれらがある

ことで感動しました。

今年の弥生文化博物館、秋の展示で大武遺跡のトチノキ製高杯が評価されています(スライド82)。これらの高杯は、北陸で作られたものが、滋賀県を通じて奈良まで行っているとされています。それが大武遺跡まで行ったということが、大武遺跡の木製品の評価をものすごく高めました。

木製品は今まで出た報告書の中でも見直すことが必要だと思います。

北陸東部と西部も木製品と土器は、弥生時代後期になるとほぼ一緒です。スライド83の竿釣瓶(さおつるべ)が、糸魚川市笛吹田遺跡と小松市白江念仏堂遺跡で出土しています。使い方は細長い棒を入れて、井戸に入れて水を組み上げます。右側は塗り取り(あかとり)、船にたまった水を出す道具と思われましたが、孔に棒を入れて使う竿釣瓶の方が良いと思います(スライド83)。

18. 北陸地方の鉄器と生産について

これから、鉄器の話です。弥生時代後期になると鉄器を作っていますという話がありますが、実は奥原峠遺跡(スライド84左)、和倉温泉の近くでバイパス工事のための調査ですが、そこには後期の鍛冶工房があって、その技術は北部九州からの技術導入があったと、北部九州の人が書いています。小松市一針B遺跡(スライド84右)には古墳時代前期に、北部九州や近畿の一部しかない蒲鉾型の羽口が出土しています。

村上市山元遺跡(スライド85~87)は鉄器などを求めて動いたことが有名ですが、私はそれよりもお墓と土器の関係が気になります。この遺跡は、竪穴住居とお墓があるのですが、お墓は遺体を土坑に埋めた後に一回抜き出して、土器を合わせた形で再葬をしている(スライド85右)と思いました。この遺跡が、鉄器と青銅器を求めています、普段使っているのは石の道具(スライド86中央上)です。日本でも数少ない青銅の筒形製品、鉄製短剣を持っています(スライド87)。けれど、墓の形態と石鏃は「弥生時代なの?(縄文時代だね)」との感じを持ちます。他に管玉やガラス玉が出土しているので、当時の一番入手したい高いものを持っています。北陸のこの時期では竪穴住居は殆どが方形や縦長の方形が多いのですが、円形かある程度楕円形の形態もあります。富山市向野池遺跡には天王山土器が伴う竪穴住居(スライド88左下)があり、楕円形なので天

王山式の形態と同じですが、炉の感じが少し違うと思います。

19. 四隅突出型墳丘墓について

次は、新しい資料を紹介します。四隅突出型墳丘墓は山陰に多いお墓で、福井・石川・富山県辺りまでありますが、最近新しい事例が増えましたので、紹介します(スライド89)。津幡町七野2号墓(スライド90)は、昔のJRが通っている谷筋で、この丘陵の一番端にあるのですが、四隅突出型墳丘墓と思われま。保存により調査が全て行われなかったのですが、20mぐらいの意外と大型だと思われま。谷筋を行くと富山エリアに行きますので、富山市杉谷4号墳がこのルートで来ていると思います。次に、福井市高柳遺跡(スライド91)では四隅が突出しながら、陸橋になっている可能性があるものが出ています。

20. 北陸地方のL字形石杵

それ以外、今まで石川県には無い、日本海側に無いと言われたものが、実はあったことが判明しました。それは、L字形石杵です。スライド92左は10年前の論文ですが、その分布は北部九州、瀬戸内、近畿、東海で終わり、日本海側では今後出土しても希だろうと纏められました。しかしその希が、現在5例もあります。L字形石杵は、底の部分を使って水銀朱を微粉末化して、発色をよくするものです。水銀朱は、細かく砕けば砕くほど、朱色が綺麗になります。2009年に論文の抜き刷りを貰った際に著者に、「残念。2008年に石川県でも報告したよ」と言いました。

七尾市万行遺跡は、七尾湾の一番東側に位置する国指定史跡です。そこでも、L字形石杵が出土しています。スライド94の左側に赤い色が見えると思いますが、分析により水銀朱でした。先端が欠損している、短い長靴のような形をしています。七尾市では小島西遺跡にもあり、七尾市内に2点あります(スライド94)。

金沢市大友E遺跡にも1点(スライド95)ありますが、縄文時代の独鈷石として本来とは違う形で報告されていました。しかし、見に行ったら赤色顔料がついていました。水銀朱なのかは判りませんが、赤色顔料を作る石器でしょう。

北陸地方では、報告書の中でL字形石杵があると書かれたのは、福井県林・藤島遺跡(スライド96)

だけなので、色々な視点で変な石器を見ることが、調査担当者は必要です。

21. 北陸地方の山陰系甗

次に山陰系甗と言われるものがあります。韓国人の学生が立命館大学在学中の論文ですが、韓国の西側に起源がある土製品が、山陰や北部九州や瀬戸内や近畿まで分布していると纏められました(スライド97左)。これは日本では山陰系甗と呼ばれる土製品です。山陰に特徴的な土製品と言われていますが、私も1・2本論文を書いています、この図では北陸は全部見落とされています。その中で、石川県内でも類例が増えたので新たに探してみました。旧富来町鹿頭上の出遺跡(スライド98上)が弥生時代後期後半で全国的にも一番古いのですが、ここで発祥する訳が無いので、山陰地方にも弥生時代後期後半のものがあると思いますが、山陰地方では終末期ぐらいから確認されています。八幡バケモンザカ遺跡(スライド98下)は変な取っ手があるので、これも山陰系甗と判断しました。昔に志賀町で採集された埴輪(スライド99右下)も山陰系甗でした。平成に合併した2町に5個体も出土しています。

加賀地方では、1例以外は小松市から出土しています。小松市は先ほどから出てくる八日市地方遺跡と白江梯川遺跡の周辺に多いことが判ります(スライド100)。

念仏林南遺跡の竪穴住居から山陰系甗が出土し、焼けた石も出ている。何か火を使う時に、これも使っていたようです。また、八里向山A遺跡にも出土しています(スライド102)。ちょっと取っ手の位置が違う変わった形です。この竪穴住居には袋状鉄のみが出土しており、朝鮮半島産だろうと言われてます。私は鉄器のことまるっきり判らないのですが山陰系と朝鮮半島系ということで、とにかく西からの影響があったことだけ、覚えておいてください。

22. 北陸地方の九州型石錘

スライド103は九州型石錘ですが、色々な形があり、分布は玄界灘に集中しています。これは長崎県の人達が集成された図です。今春の日本考古学協会総会では、高校生がもっと細かい分析をパネル展示していました。その中では、石錘は小地域で石材が違うことを纏められました。その時に石川県にも九州型石錘があることを思い出しました。色々な人の発表を聞くことで、聞いた人も色々な話ができるの

だと思っています。皆さんは図面より写真の方が判ると思いますが、形のバリエーションが沢山あります。石の中央に穴を持つもの(スライド104)がありますが、砲弾型(スライド103)が多く、石材は滑石のものもあるようです。

九州型石錘の分布(スライド104)は、玄界灘以外に、壱岐や対馬、松江、青谷上寺地遺跡にも出土しています。本来はここで出土は終わっていましたが、石川県でも赤い印の遺跡に出土しています。しかし、今週の木か金曜日に黒埼町史を見たら九州型石錘がありました。

スライド105・106は石川県内の九州型石錘ですが、2と4は同じ石材なので同じ所で作られた可能性もあります。1は色が違うのと4は滑石製で違います。能登の内陸部に出土した3や、富山県射水市、昔の大島町にも出土しています。その理由を考えますと、今は干拓で埋められた潟湖周辺にから出土しています。それ以外に、3は山中ではなくて、そこから山に上がる所です。そこから氷見のほうに抜けるルートの一部でもあるのですけど、そんな所に石錘が出土しています。この遺跡で面白いのは、時期が判らないのですが、文様と調整がない土器に穴が空いたA・Bがあります。ひょっとしたら、穴に紐を縛ったタコ壺と思いました。つまり九州から来た人が九州型石錘とタコ壺で食料を獲っていたので、この遺跡と一緒に持ってきたのかなと思いますが証明は難しいです。ただし、これを1つのセットと見れば、九州の人が来て、実は富山の方か新潟の方に行きたかったので山越えをしようとしたが、やっぱりあきらめて置いていったのではないかという物語のようなことも思ったりもします。

スライド107は加賀地方の九州型石錘ですが、右下の205は土製品です。九州型石錘は石製ですが、小松市平面梯川遺跡では土製品を作っていますので、やっぱり九州型石錘を知っていたのだろうと思います。

スライド108は金沢市畝田・寺中遺跡の石錘群で、こういうセットがあります。横に溝が回るものを瀬戸内型石錘と、頭が瘤状になる中部型石錘が多いと言われてます。それに九州型石錘と、右上の大きな石の中央に紐掛けの溝があるのは礎石です。これは漁業的な錘や船の礎にして、このようなセットで多分あったんだろうと思います。スライドの表題に「+新潟県」としたのは新潟市緒立遺跡B地区に、古墳前期だと思われる九州型石錘が出土しています。

(スライド108左下)。だから最低でも九州の人か、山陰の人が緒立遺跡まで来ている可能性があります。それ以外に、長岡市五千石遺跡に変な石製品がありますが、九州型石錘はならないと思いつつ、今後気になければいけない資料です。

23. 交流を支えた船

スライド109は準構造船の材であり、右側は丸太のくり抜いた船底板に、船縁をかさ上げするための舷側板です。こういう船が白江梯川遺跡でも出ています。

スライド110が最後ですが、このピンクで塗ってある場所が、山陰系甕や九州型石錘が出ている大体の場所です。赤丸印は、寄港地として良い場所であります。北前船の場合輪島や旧門前町黒島や能登町小木・宇出津など、いろいろな所がありますけど、基本的には日本海の西からの波がぶつかる所で出土しています。能登半島をたまに越えたものが上越市や柏崎市や緒立まで来ていた可能性があります。

スライド110左は準備造船の縦板(波よけの板)です、準構造船で日本海を越えて来たのでしょう。実は金沢市西念・南新保遺跡では口縁部に文様が書いた壺(スライド110左下)があります。左側は船を簡単にした文様と、三日月は荒波であり、いくつも描いてあります。この壺の文様は荒波の日本海側を越えてきた船というのを、描いているので、当然金沢市にも直接色々な地域の人に来ていたと思います。その逆に、天王山式の人々は、船で沖に出てから風を使えば、富山湾に入り、能登半島に必ずぶつかります。この赤の逆の流れとして、新潟県や東北地方北部の人達が、日本海を船で色々な物を乗せて石川県を目指して上陸し、七尾から羽咋へ、富山から金沢へと陸路で来ていたと見ております。

石川県へは、陸路ではなく海路を中心として、青谷上寺地遺跡や山陰地方をリレーしてかなりの人達が来ていると思います。丹後地方や若狭地方を越えて直接来ています。冒頭の渡邊所長の挨拶の話も踏まえて、下越の人達は、中越・上越を越えて直接富山・石川に来たので、お互いにいろいろ影響していたと思います。その結果は物が残らないと考古学では語れないのですが、その語る要素が色々あればもっと面白いのですが、現状としてはなかなかありません。逆に村上市山元遺跡での青銅器と鉄器の評価と、大武遺跡での木製品の評価を他地域の私達から投げかけて、地元の新潟県で色々考えもらえたら

良いと思っております。

長かったですが、以上、私の講演は終わらせていただきますと思います。どうもありがとうございました。

彌生時代の時代7
「弥生時代後期の北陸と北陸・長野との交流
～天王山式土器から考える」 2019/11/7

弥生時代における北陸西部 と下越地方の交流

(公財) 石川県歴史文化財センター
関係調査グループ GL 久田正弘

スライド1

縄文・弥生時代の石材 の産地—石川県の事例

剥片石器の石材は、縄文時代では能登半島(北部では安山岩(志賀町旧富来町大福寺周辺)・玉輪山(珠洲市山町)・珠洲市山町(珠洲市山町)・玉輪山(珠洲市山町)など)を利用し、弥生時代では能登半島(志賀町旧富来町大福寺周辺)・玉輪山(珠洲市山町)などを利用しています。縄文時代では、バリエーションが豊富ですが、弥生時代になると、ほぼ安山岩(サヌカイトを含む)に統一されます。

縄文時代の遺跡石材は、新潟県糸川市周辺などから運ばれますが、輪島市塚田遺跡・道下元町遺跡などでも製作され、石川県内外に運ばれています。

弥生時代は、羽咋市吉崎・次尾遺跡で柱状節理の安山岩を基で製作するが、能登北部・加賀地方の磨製石斧が若干は長野県の須田石斧が多数出土。

小松市八日市地方遺跡では、10cm以上離れた手取川の砥石を利用して磨製石斧を製作。北部九州・北海道産石斧が若干、長野県産の須田石斧が多数確認されている。磨製石斧の柄は10数点出土。

(公財) 石川県歴史文化財センター 2019
【和歌山県・前橋市シンカイ遺跡】に加盟

スライド2

石器流通のイメージと石材の多様性 富山市小竹貝塚(縄文時代前期)

44 遠く石材の輸入イメージ
「山形県文化財研究所2014より一部改訂・一部複製」
※遠く石材の輸入イメージは、富山県産の磨製石器。

大塚市立弥生文化博物館 2015 「海をこめた縄文人」

スライド3

小松市八日市地方遺跡の黒曜石製石鏃

- 八日市地方遺跡は、北陸を代表する弥生時代中期の黒曜石遺跡で、市街部では、縄文時代中期後半～前期の土器などが報告済み。黒曜石遺跡では、晩期後半が報告済み。
- 平成27～29年度発掘調査の基礎調査は、縄文時代後期中葉の土器などが再確認された。中期後半の土器も確認された。
- 黒曜石出土の石鏃では、安山岩製が主体だが、3点の黒曜石が確認された。
- 北陸地方の縄文時代の黒曜石は、黒曜石の産地は？ 所屬時期は？

スライド4

能登北部での磨製石斧生産 —縄文～弥生

七尾市能登島町通シノハラ遺跡(消費地?)
消費地へは敲打現場で搬入?
輪島市塚田遺跡(製作遺跡)

能登町真庭遺跡(消費地)

米原市越し又遺跡(消費地)

スライド5

東北で出土した北陸の土器

能登町有馬遺跡 1992 【図説】
能登遺跡

能登町有馬遺跡 1996 【図説】
能登遺跡

国立歴史民俗博物館 2001 【縄文文化の扉を開く】
に加盟

スライド6

「の」字状石製品 てなに?

金沢市三小牛ノ川遺跡
イモガイ(模写)

国立歴史民俗博物館 2000 『北の縄文時代』

福井市博物館 1995 『縄文時代展』

スライド7

沖縄の貝をコピーした土製品

イモガイ

ホラガイ
東海大学出版会 2000 『日本近海貝類図鑑』

大塚市立弥生文化博物館 1998 『縄文のゆり・弥生の心』

ダカラガイ
富山市北代遺跡
大塚市立弥生文化博物館 1998 『磨製時代の玉石器』

新富原村上市上山遺跡
福井市博物館 1995 『縄文時代展』

国立歴史民俗博物館 2001 『縄文文化の扉を開く』

スライド8

西日本出土の北陸系土器など

縄文時代中・後期

- 西日本での北陸系土器は、中期初頭（鹿嶋遺跡の陶器製造跡）、前期後半（鹿嶋遺跡前遺跡）、中期中葉（鳥取県遺跡；南加賀、能登島市ノ原遺跡）、後期中葉（福山県津島町大遺跡）などが報告されている。
- 北陸地方では、の字状石製品やカラ貝形土製品が少量確認され、後期中葉には水鏡糸の利用が能登遺跡で確認されている。
- 後期末になると鳥取県三田谷遺跡、岡山県久野遺跡の遺跡などで有文瓦葺などが確認されているが、瓦葺が見落とされている。
- 後期末頃に、御物石器が西日本などに出土し、北陸地方でも九州地方の玉笥が出土が確認される。

中国国史研究会 2018 『中国時代の外東系土器』
 北陸山形立地博物館 2010 『よみがえる和歌山の縄文世界』

スライド9

九州の玉と北陸玉

野々市市御経塚遺跡

大塚志子 2007 『九州地方の石製品発見』『石川県歴史文化財情報第7号』（財）石川県歴史文化財センター
 大塚志子・森 謙 2011 『縄文時代後晩期における九州地方の玉笥の分布』『日本考古学協会研究』
 大塚志子 2019 『九州における発土玉笥の系統』『考古学研究会』

野々市市御経塚遺跡

福井県立博物館 2004 『北陸の玉』

スライド10

縄文時代後期末から晩期初頭における北陸系土器と九州の玉の出土

大塚志子 1997 『日本の美術 第39号縄文時代の装飾品』

スライド11

御物石器の分布

縄文時代後・晩期

野々市市御経塚遺跡 穴水町比良遺跡 能登町真脇遺跡
 高良市大森遺跡 飛騨市ノ下遺跡
 大分県竹田市田井原遺跡 飛騨市向山遺跡
 米原市杉原遺跡

大塚志子 1997 『日本の美術 第39号縄文時代の装飾品』

スライド12

富山県と石川県の漆製品

縄文時代後期末～晩期前半

小矢部市桜町遺跡 金沢市中屋サワ遺跡

小矢部市教育委員会 2007 『桜町遺跡』
 金沢市歴史文化財センター 2010 『中屋サワ遺跡』

スライド13

石川県能登町真脇遺跡出土の大洞B1式土器

- 真脇遺跡第15次調査第1層上面出土の大洞B1式深鉢である。
- オ-232・234は同一個体である。
- 石川県内では大洞B式と断定できる資料は殆どない。
- 文様以外に、胎土も地元とは異なる。

未報告資料なので掲載は見合わせます

スライド14

上越市奥の城西峯遺跡は西日本と東北地方との架け橋

東海地方の突帯文

西日本系突帯文 高山市の下野式土器
 112 113

東北地方中部の隆線連子文土器
 東北地方中部の隆線連子文土器
 132

中部村教育委員会 2004 『奥の城西峯遺跡』

スライド15

隆線連弧文・連子文土器の分布

東北地方中部から各地に運ばれたと見られる縄文時代後半

坂井市舟吉 福島遺跡 富山・桜町 石川・奥の城西
 112 113 132

高知 原宿 新潟 奥の城西
 福井市杉田遺跡 山形 作野

田邊博己・小林清博 2007 『豊付1式土器』
 田邊博己・小林清博 2007 『豊付1式土器』
 小字隆 1990 『日本列島大地図説』

スライド16

西日本への北陸系遺物の動き

- 晩期前半には、立命館大学前倉の滋賀県杉沢遺跡では北陸地方の御経塚系土器が流入。
- 神奈川種系遺物を調査された家根裕多氏が、真鍋遺跡での資料調査で、大宮系よりは北陸系が親近感があるとのコメント頂いた。
- 晩期後半になると、小林青樹・松葉博己・石川日出志氏などによる論考が報告されている。

渡邊 肇 2018 『動向東日本系土器の出現・近畿内地方への波及』『中近畿地方の外來系土器』中国編纂研究会

石川日出志 2000 『突帯文期・淡路川期の東日本系土器』『突帯文と淡路川』土器研究会編纂委員会

スライド17

西日本における東日本系土器の分布

小林青樹 2000 『東日本系土器がみられる地域・弥生・古墳時代』『突帯文と淡路川』土器研究会編纂委員会

スライド18

御経塚遺跡の突帯文系土器

野々市教育委員会 1983 『御経塚遺跡』

野々市教育委員会 2003 『御経塚遺跡』

野々市教育委員会 2009 『御経塚遺跡』

野々市教育委員会 1989 『御経塚遺跡』

スライド19

北陸の突帯文系土器

白山市長竹遺跡

宮永塚遺跡

下老子笹川遺跡

松本市教育委員会 2003 『発光顕微鏡・宮永塚遺跡Ⅱ・宮永塚遺跡Ⅳ・安田三郎発光顕微鏡』

富山県文化振興財団・富山県文化財調査課 2006 『下老子笹川遺跡』

スライド20

初圧痕土器

野々市 2006 『野々市町史 通史編』

スライド21

赤塗り土器の分布と遠賀川式壺の分布

小字 1990 『日本列島大地図誌』

小字 1990 『日本列島大地図誌』

スライド22

山陰と北陸地方の関係

弥生時代前期

信付遠賀川壺 (出雲地方?)

松江市西川津遺跡

鳥取県智頭枕田遺跡

小松市八日市地方遺跡

留付突帯文壺

伊都山歴史博物館 2017 『古代山陰と伊都山』

小松市教育委員会 2006 『八日市地方遺跡～弥生から今』弥生時代研究会

松本博三 2004 『遠賀川系土器における山陰系土器の影響』『鳥取県立考古学館』21『鳥取県立考古学館』鳥取県立考古学館

スライド23

舳倉島への航海—海獣の狩猟と航海の進めるペー

深溝遺跡

舳倉島沖上りの山崎系壺

大塚洋一郎・宮文化博物館 2013 『弥生人の船』

深溝遺跡

輪島市

シラスナ遺跡

石川謙介・野土豊利 1978 『輪島系シラスナ系壺』

輪島市教育委員会 1985 『輪島系・シラスナ系壺』

シラスナ遺跡 国土院地研院

スライド24

東海地方の北陸系土器

一宮市佐治寺野田遺跡の柴山出村式の宇形文或斜七尾市周辺から持ち込まれた(弥生前期初期)

松原市赤部遺跡出土へ持ち込まれた月影式赤部器台(弥生時代後期末)

名古屋中・高須市朝日遺跡出土の柴山出村式の埴輪蓋(弥生時代中期初期)

海路舟針

久田正弘 2016 『弥生時代における土器の移動について』『石川県埋蔵文化財情報第36号』(公報) 石川県埋蔵文化財センター

スライド25

柴山出村式系壺の分布

上野市相原人遺跡
上野市相原明遺跡
道山市布衣遺跡
富山市三枝遺跡
新上市新野白山神社周辺の遺跡
新上市八重電神社
一宮市山中
柴山出村
八尾市地方
上野市
新上市大橋上
新上市
小字館 1990 『日本列島大地図』

スライド26

八日市地方遺跡の九州北部・北海道系石斧

八日市地方遺跡の小松市調査区の河邊の下層(XIV~XVII層)から、縄文時代中期後半~晩前期末、弥生時代前期後半~中期初期の土器と1・2が出土。3は中期前半~中葉。

1は、九州北部の扇形製平片刃石斧。長さ6cm、幅2.7cm、厚さ0.7cm、比重2.72。全面がよく研磨され、縦目線で黒灰色と灰色の互層の縞は確認されるが縦線、九州北部から直接搬入された可能性が高いという。

2・3は、北海道で製作された三面片であり、秋田平野以北の東北北部からの直接搬入された可能性が高いという。2(259)は組成砂岩長さ10.7cm、幅6.2cm、厚さ4.5cm、重量394.7g、比重2.52である。3(50570)は安山岩類で、長さ6.74cm、幅6.78cm、厚さ4.38cm、重量235.92g、比重は2.49である。

佐藤博紀・宮坂 晴 2018 『石川県小松市八日市地方遺跡土器の調査と石斧と土器の年代について』『考古学研究所』299号

スライド27

七尾市赤浦遺跡の柱状片刃石斧—弥生時代前期に西日本から運ばれた石斧か

七尾市赤浦町に所在する赤浦遺跡は、赤浦湯を窪む砥石隈に立地する遺跡で縄文時代中期中葉~後期の貝塚を伴う集落遺跡である。

昭和59年の調査で、包帯層から縄文時代中期前半~後期前半の土器と柱状片刃石斧と弥生時代前期の柴山出村式壺・深鉢が出土した。

柱状片刃石斧は、長さ13.5cm、幅5cm、厚さ3.7cmである。

七尾市教育委員会 1985 『七尾市赤浦遺跡 石川遺跡の発掘』2008 『弥生ムラの遺跡』

スライド28

西日本系の柱状片刃石斧か

六本町市遺跡：前~中期

石川県立歴史博物館 2008 『弥生時代の瓦葺』

金沢市上宮遺跡：前~中期

七尾市古跡・区分遺跡：前~中期
残存長さ98cm、幅36cm、厚さ37mm、重量649g

加賀市志保山遺跡：前~中期
伊賀県歴史博物館 2017 『古代出雲の歴史』

スライド29

新潟市緒立遺跡に運ばれた加賀・能登の土器 II 期後半

加賀市教育委員会 1983 『緒立遺跡』

小松市教育委員会 2003 『八日市地方遺跡 I』から複製

八日市地方遺跡の築瓦文

糸織山玉立山遺跡

海路舟針

久田正弘 2016 『弥生時代における土器の移動について』『石川県埋蔵文化財情報第36号』(公報) 石川県埋蔵文化財センター

スライド30

緒立遺跡の玉類・九州型石錘—産地は何処?

弥生・古墳時代の玉類

黒埴町 1998 『黒埴町史資料 編1 原始・古代・中世』

九州型石錘

スライド31

新潟県に運ばれた北陸系櫛描文土器

新潟市江南区(旧亀田町) 西郷遺跡 上越市吹上遺跡 S K 106: II 期前半(南加賀地方から運ばれた壺) II 期後半(能登地方から運ばれた壺: 546)

上越市吹上遺跡 S K 106 (加賀地方から運ばれた壺: 548) II 期前半

久田正弘 2016 『弥生時代における土器の移動について』『石川県埋蔵文化財情報第36号』(公報) 石川県埋蔵文化財センター

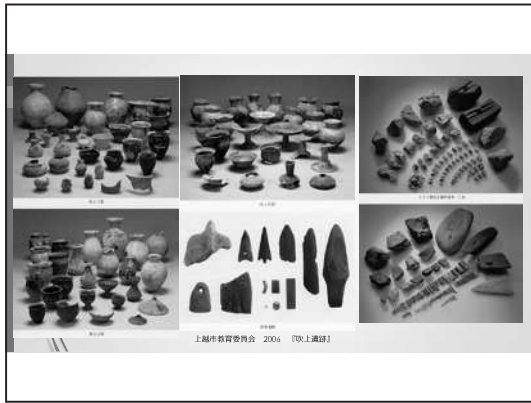
スライド32



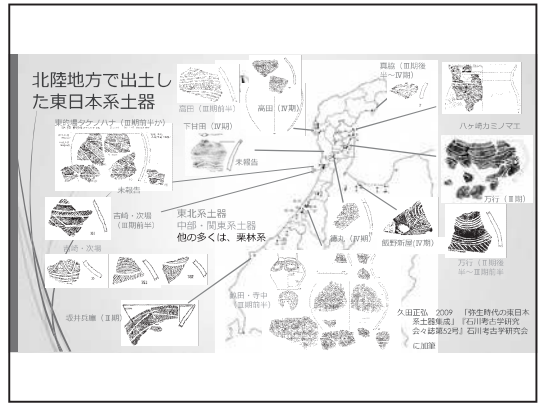
スライド33



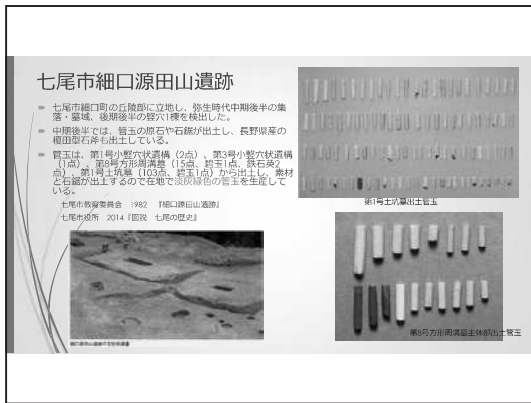
スライド34



スライド35



スライド36



スライド37



スライド38



スライド39



スライド40

石川県志賀町八幡バケンザカ遺跡の外來系遺物

- 羽咋郡志賀(旧志賀)町八幡地区で中野原を流れる北川に、1000年を遡る弥生時代中期後葉から後期本葉の集落遺跡である。
- 1は朝鮮半島製玉環であり、長さ4.9mm、幅2.0mm、厚さ1.5mm、重量0.15gである。黒色の硬質肉桂と密着し、縞は不明瞭だが存在する。
- ヒスイは10点あるが、粗悪なものが多い。
- 2は、環状の勾玉でC字形と思われる。残存長21mm、幅12mm、厚2.8mmである。次上遺跡で製作された可能性が高い。
- 碧玉の石材は、緑色凝灰岩43点、鉄石炭41点を確認している。淡灰緑色が主色と多く、淡緑色の石材は12点少なく、中間系1点がある。

志賀町教育委員会 2000 『志賀城跡』

スライド41

羽咋市吉崎・次場遺跡

- 弥生時代前期末～古墳時代初期までの遺跡で、吉野川流域に立地した環状集落である。
- ヒスイ勾玉や碧玉などの玉類や石鏡や磨製石斧などを製作した。
- 朝鮮式磨製石剣や銅剣型磨製石剣、長野県産の環状型石斧など、遠方から運ばれた石斧が出土。
- 土製銅鍔やなかごが出土しており、青銅器の鋳造を行っていた。

石川県立埋蔵文化財センター1987・1988 『吉崎・次場遺跡』
 羽咋市教育委員会 2000 『吉崎・次場遺跡第1次』
 小松市教育委員会 2015 『小松発・北陸新幹線ルート弥生文化を探る』

スライド42

石川県羽咋市吉崎・次場遺跡の西日本系石剣

- 1は、市道調査区から出土した楕圓形の石材で作られた石剣である。朝鮮型磨製石剣であるが、日本海側の畿北は松本市石行遺跡(前期)で出土。
- 2は、県道調査区V区V-12号土坑から出土した朝鮮形石剣である。黒色硬質であり、両側に刃が作り出されている。長さ5.1cm、幅3.7cm、厚さ1.2cm、重量22.7gである。

石川県立埋蔵文化財センター1987・1988 『吉崎・次場遺跡』から編集
 小松市教育委員会 2015 『小松発・北陸新幹線ルート弥生文化を探る』から抜粋

スライド43

吉崎・次場遺跡の玉作り

石川県立埋蔵文化財センター1987・1988 『吉崎・次場遺跡』

スライド44

石川県羽咋市吉崎・次場遺跡の磨製石斧製作

- 吉崎・次場遺跡では、2種類の安山岩などを使用して、大型磨製石斧などを生産。
- 柱状節理の安山岩で白色の斑晶を持つ。
- 粗割・割削・磨打・研磨段階の未成品が出土。
- 自家消費的な生産の様であり、能登北部の石斧や加賀地方の石斧も少量出土する。
- 長野県産の石斧は12点を確認し、大型磨製石斧、扁平片刃石斧、環状石斧を確認している。

林大智 2009 『弥生時代における弥生時代の生産と流通』『中野の弥生時代研究』中野の弥生時代研究会発行委員会
 環状石斧(角閃石安山岩産地産と長野県産) 吉崎・次場遺跡の磨製石斧

スライド45

羽咋市吉崎・次場遺跡の磨製石斧製作

角閃石安山岩産地(角閃石安山岩産地)の石斧製作工程 巨大勾玉
 林大智 2009 『弥生時代における弥生時代の生産と流通』『中野の弥生時代研究』中野の弥生時代研究会発行委員会
 角閃石安山岩の石斧(環状石斧、扁平石斧) 金沢市城田、寺中遺跡の安山岩 志賀町大島の安山岩(柱状節理、角閃石入り)

スライド46

羽咋市吉崎・次場遺跡に運ばれた南加賀産の敲石一珪岩(珪石/石英)

石川県立埋蔵文化財センター 1987 『吉崎・次場遺跡第1次』 第131頁177
 林大智 2009 『中野の弥生時代研究』中野の弥生時代研究会発行委員会
 小松市八日市地方遺跡 小松市教育委員会 1987 『八日市地方遺跡』

スライド47

久田正弘 2018 『能登・加賀地方の中期社会と交流』『弥生時代の地域社会と交流—能登編(前)』地域と考古学の会 第一号改定

スライド48



スライド49



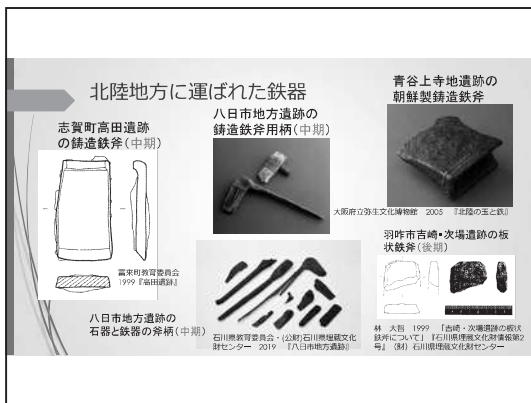
スライド50



スライド51



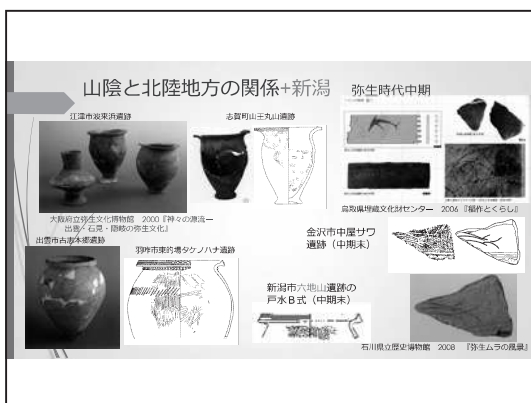
スライド52



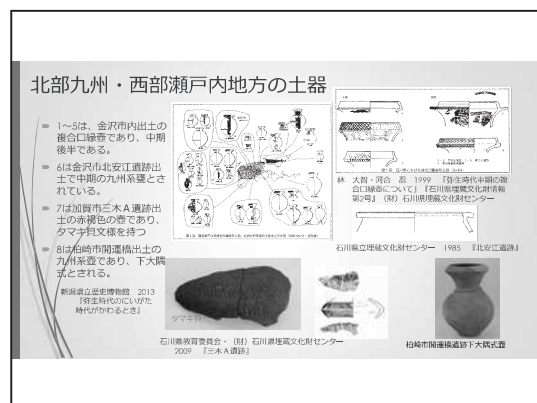
スライド53



スライド54



スライド55



スライド56

能登・越中地方の銅鐸形土製品など

- 1は、羽咋市吉崎、次場遺跡1-4号溝（堀家）の上層から出土した。中期中葉に産出され、後葉にはほぼ上部まで産出している。高さ5.9cm、幅5.5cm、直径5mm強の小孔を持つ。外面はハケとナデ調整であり、文様を持たない。内面はナデ調整のみである。
- 2は、富山県小矢部市城生南遺跡（弥生時代中期後半が主体）から、銅鐸形土製品（高さ4cm、幅3.5cmの破片2点）が出土し、溝と双孔が表現されているという。55は岡崎に似た土製品であり、高さ6.5cm、幅4cmの卵形で、側面に指孔に似た穴の痕跡があるという。

石川県立埋蔵文化財センター 1987・1988 『吉崎・次場遺跡』

小矢部市教育委員会 2005 『平成16年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査報告書』

スライド57

小松市八日市地方遺跡の銅鐸形土製品（市調査区）

- 小松市教育委員会2003 『八日市地方遺跡1』 2006 『県文化財指定記念特別展 八日市地方遺跡』
- 図3-1は高さ40mm、2は高さ49mm、幅51mm、4は高さ53mm、幅74mm、5は高さ52、幅64mm、6は高さ33mm、幅68mmである。
- 1・2は文様を持ち、3は文様を持たない。5・6は鈕を表現していると思われる。
- 1・2は集落Ⅰ期（八日市地方6~8期）、4は集落Ⅱ期（八日市地方9・10期）の可能性があると看做（下演貴子氏談示）

スライド58

小松市八日市地方遺跡の銅鐸形土製品（県調査区）

- 1999年県調査5区河邊出土の銅鐸形土製品であり、同一個体と思われる。
- 高さ65mm、身部高40mm、胴部幅56mm、裾幅径80mmである。
- 鈕は欠損し、胴部は円形に吹き抜けて空いている。
- 石川県埋蔵文化財センター 2004 『八日市地方遺跡』 から掲載。（断片的写真は3回目の公開）

石川県教育委員会、【財】石川県埋蔵文化財センター 2004 『八日市地方遺跡』

スライド59

北陸地方の分銅形土製品

- 北陸地方では、若狭地方に点以外は、石川県内で44点以上確認される。
- 羽咋市内では、吉崎・次場遺跡4点、東的増タケノハナ遺跡3点、金沢市内では藤江遺跡1点、戸水遺跡4点、白山市内では横江古墳遺跡1点、小松市内では大長野A遺跡1点、加賀市新橋遺跡3点が確認。
- 小松市八日市地方遺跡では、市調査区では13+2点、県調査区では1+10点を確認したが、県調査区では整理作業が進むにつれて追加が込まれる。（令和元年10月現在）

久田正弘、2006 『北陸地方の銅鐸形土製品』 『北陸地方の考古学』 第2巻、1〜2巻

スライド60

分銅形土製品の最新資料

- 小松市教育委員会 2016 『八日市地方遺跡Ⅱ』
- 小松市教育委員会 2008 『八日市地方遺跡Ⅰ』
- 石川県教育委員会、【財】石川県埋蔵文化財センター 2019 『八日市地方遺跡調査報告書』
- 県センター介乎元年度整理作業で確認
- 小松市大長野A遺跡（未報告）
- 大塚市立弥生文化博物館 2000 『神々の神楽—出土品、石巻、羽咋の弥生文化—』

スライド61

金沢市戸水B遺跡の滑石製指輪—IV-3期

- 金沢市戸水B遺跡 跡さD12006上層から出土。
- 外径22mm、内径14mm、太さ4mm程度。
- 現在の指輪サイズは9~10号
- 滑石製であり、暗い茶褐色。

石川県教育委員会、【財】石川県埋蔵文化財センター 2004 『戸水B遺跡（10・12・13区）』

大塚市立弥生文化博物館 2000 『弥生土白土—長島、信濃の彌生社会—』

スライド62

北陸と長野の関係

長野市北山遺跡の埴田産石斧

大塚市立弥生文化博物館 2001 『弥生土白土—長島、信濃の彌生社会—』

長野市立弥生文化博物館

久田正弘、2018 『埴田・埴田地方の中期社会と文明—弥生時代、埴田と信濃の文化—』

スライド63

北陸地方で出土した天王山式土器など

- 石川県立歴史博物館 2008 『弥生A—F—期』
- 白山市中棚川遺跡
- 中棚遺跡石斧マハタケ遺跡
- 石川県立埋蔵文化財センター 1998 『中棚遺跡』
- 式生市特神寺遺跡
- 福井県教育文化財センター 2008 『特神寺遺跡』
- 久田正弘、2009 『弥生時代の東日本土器編』 『石川考古学研究会の誌談』
- 石川県考古学研究会 加賀
- 下巻子母川遺跡・赤山式（東北地方北部〜北陸道）
- 富山県文化財研究所埋蔵文化財調査報告書 2006 『下巻子母川遺跡』
- 富美・小松市ノリ遺跡（公報）石川県埋蔵文化財センター 2019 『石川県埋蔵文化財調査報告書4号』

スライド64

中能登町（旧鳥屋町） 大槻3号墳—弥生時代後期前半

- 中能登町（旧鳥屋町）川端地区に位置する帆立塚に立地する。
- 大槻3号墳は高さ2.0m、15.2×10.8mの長方形の墳丘を持つ台状墓であり、3基以上の土坑墓が確認され、次地上層式の石杯・壺の破片が出土した。
- 出土土器が3点報告されているが、詳細は不明である。
- 壺は、東北地方の天王山式土器を能登で模倣した壺である。

石川考古学研究会 1977 『鳥屋・中能登地区分布調査報告』 『石川考古学研究会43第20号』 石川考古学研究会

谷内隆自 1982 『北陸地方の歴史』 『日本における北方系陶器をめぐる諸問題』 近畿文化財研究会

スライド65

北陸地方出土の大阪府生駒西麓産の壺

白山市野木遺跡

久田弘 2003 『弥生時代における影響関係について』 『石川歴史文化財情報第3号』 『財』石川歴史文化財センター

白山市教育委員会・『財』石川歴史文化財センター 2004 『東約場ヶノハ遺跡』

永登市大滝遺跡

石川考古学研究会 2008 『野木遺跡』

松任市教育委員会 2008 『野木遺跡』

石川考古学研究会 2008 『弥生ムラの歴史』 『弥生ムラの歴史』

水野市史所 2002 『水野市史』資料編五号古蹟

スライド66

小松市一針B遺跡の鑄造関係

石川歴史文化財センター 2002 『一針遺跡、一針C遺跡』

大谷立史 2003 『北陸の土と器』

スライド67

吉崎・次場遺跡の鑄造関係

石川考古学研究会 2008 『弥生ムラの歴史』

石川考古学研究会 1987・1988 『吉崎・次場遺跡』

あわら市南稲越遺跡の鑄造関係

あわら市伊井地区に位置する弥生後期—中世前期の遺跡である。4C④（包含層）出土の土製品であり、高麗産の青銅は「オチア」調整で内面はシズリがある。出現がもつた、86×100mm、厚さ33mm

あわら市教育委員会 2007 『南稲越遺跡』

林 大樹 2000 『伊井地区、次場遺跡出土の土製土器について』 『石川歴史文化財情報第3号』 石川歴史文化財センター

スライド68

青谷上寺地遺跡と北陸地方の木器の関係

青谷上寺地遺跡

八日市地方遺跡

青谷上寺地遺跡

金沢市戸水遺跡

ヤマクワ

ヤマクワ

サクラ属

久米正弘 2014 『木製品の本質と制作について』 『石川歴史文化財情報第32号』 『財』石川歴史文化財センター

スライド69

青谷上寺地の玉の交流

鳥取県歴史文化財センター 2013 『日本海を航行する弥生の石』

鳥取県歴史文化財センター 2012 『海を渡った石と鉄』

佐賀県津守中宮遺跡

花卉高杯の交流

スライド70

花卉高杯（6弁）

鳥取県青谷上寺地遺跡：ヤマクワ

金沢市西念・南新保遺跡：クヤキ?

小松市白江徳川遺跡：ヤマクワ

後元された高杯

鳥取県歴史文化財センター 2008 『弥生の器玉—花卉高杯とその特異』

スライド71

金沢市西念・南新保遺跡の花卉高杯

金沢市教育委員会 1996 『西念・南新保遺跡』

口縁部の草花

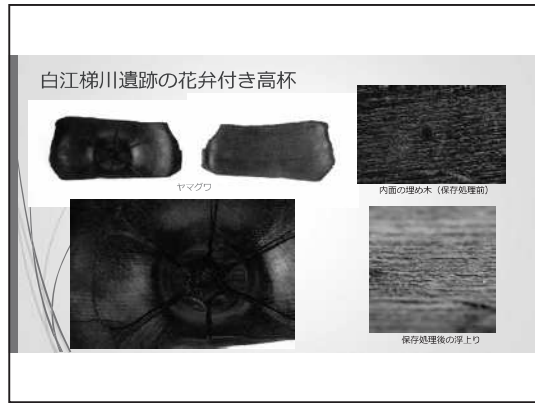
木目の縞目—ヤマクワでは?

内面の縞目

スライド72



スライド73



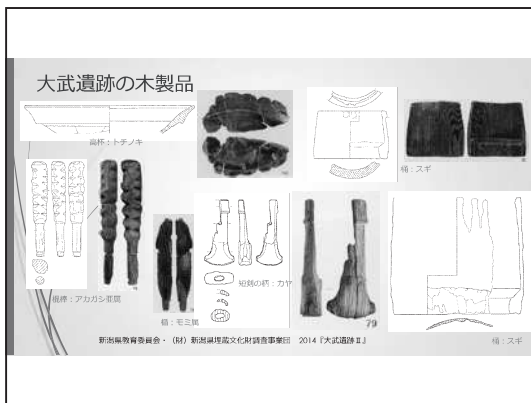
スライド74



スライド75



スライド76



スライド77



スライド78



スライド79



スライド80



スライド81



スライド82



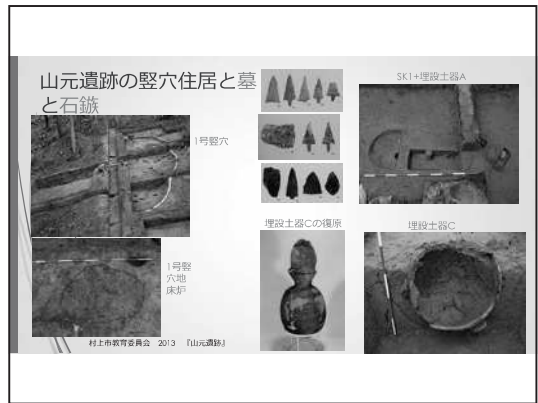
スライド83



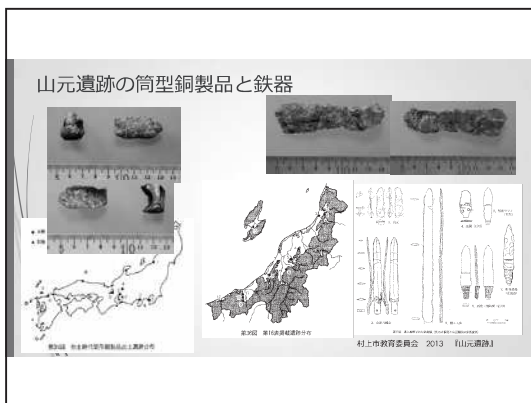
スライド84



スライド85



スライド86



スライド87



スライド88

四隅突出型墳丘墓の新例

大塚行三博士文化情報館 2000 『浮城の歴史―丹波・石野・姫路の弥生文化―』に収録

福井市高柳遺跡S1-B02

福井市小羽山30号墓

白山市一塚遺跡 S X21

津幡町七野2号墓

七野古墳群調査委員会 2010 『七野古墳群』

スライド89

石川県津幡町七野2号墓―四隅突出型墳丘墓？

- 石川県津幡町七野2号墓は、石川県から富山県に接する谷筋を見下ろす丘陵上に立地する。弥生時代中期の遺物も少量出土するが、弥生時代後期の2基の墳丘墓が調査・確認された。
- 2号墓は、最も高所に位置し、現状保存の為に確認調査が行われた。
- 東側の3号墓との間に緩やかなV字状の窪みがあるので、約20m四方の範囲と思われる。
- 墳丘は削り出して整形されており、隅の突出と浅い溝が検出され、北東側の突出が顕著である。
- 2号墓北の南溝外側に長さ2m以上、幅約1mの土坑を確認。墳丘外埋跡と認められる。

七野古墳群調査委員会 2010 『七野古墳群』

スライド90

福井市高柳遺跡ST-B02

- 福井市高柳町・大和田町・高木町域内に位置する遺跡であり、縄文時代後半～古代までの集落遺跡である。
- B地区は弥生時代末の周溝を持つ建物3棟、掘立柱建物2棟、方形周溝墓7基、四隅突出型墳丘墓1基が確認された。
- ST-B02は、墳丘は東西6.1m、南北6.5m、周溝幅間は、東西1.6m、南北1.4m、突出部長は約2m、幅約1.5m。墳丘は削平されて残っていない。
- 周溝の深さは、最大で0.3mであり、南側突出部は周溝が廻らないので、墳丘への入り口の可能性がある。

福井市教育委員会 2011 『高柳遺跡』

スライド91

L字形石杵の分布

- 水銀朱を微粉末化して発色を良くするもの。
- 時期は弥生時代後期～古墳時代前期である。
- 北部九州～瀬戸内～近畿～東海地方西部に分布。

石野大文 2009 『弥生時代L字形石杵の歴史的研究』『古代122号』早稲田大学考古学専攻 収録

七野市小羽山遺跡

七野市万行遺跡

七尾市小島西遺跡

高木市大友E遺跡

国土地理院地図

スライド92

七尾市万行遺跡（国指定史跡）

七尾市万行町域内に位置する縄文～中世の遺跡であり、七尾市を築く標高6～10mの砥石台上に立地する。

古墳時代初期に竪穴建物で数棟単位で点在する小集落が築かれ、破格の規模を持つ大型建物群が遺構された。

大型建物は、古墳前期前半に造営された平行する第2条によって区画された。南北74m、東西39m以上の範囲に、南北に柱筋を揃えた建物が、古群3棟、東群3棟が確認された。

建物は西群から東群へ建て替えられ、柱の直径約40cmで柱間が約4.5mで、建物の床面積は約150～320㎡に及び巨大な建物群である。

大型建物群の廃地直後には、居間や祭場などと想定される大型方形区画（1辺22.5m）が造営された。

中塚宏史 2011 『万行遺跡と謎の巨大建物』『図説 歴史の謎』

七尾市史稿 2014 図説 七尾の歴史

★ L字形石杵出土地点

スライド93

七尾市万行遺跡と小島西遺跡のL字形石杵

B7区・I3遺構線面出土であり、全長128mm、幅71mm、厚さ58mm、重量65gである。表面は丁寧に研磨されており、正面が欠損しているが、L字形石杵である。作業面の窪みには水銀朱が多く付着するが、欠損部や破面にも薄く水銀朱の付着が確認される。

七尾市小島西遺跡の河道（鞍部）の古墳時代～古代の層から出土した。L字形石杵（石野分類b2）であり、長さ134mm、幅78mm、厚さ47mm、重量742gであり、作業面には水銀朱の痕跡は確認出来ない。

石川県教育委員会（財）石川県歴史文化財センター 2008 『小島西遺跡』

スライド94

金沢市大友E遺跡のL字形石杵

- 金沢市大友1～3丁目域内に位置する弥生時代中期後半～中世にかけての遺跡である。
- L字形石杵は、3区G52q SD3002（自然河川）下層から出土し、鉄銹石として報告。
- 長さ160mm、幅67mm、厚さ70mm、重量51gの灰黄色の砂岩製、赤色顔料を確認した。

金沢市埋蔵文化財センター 2016 『大友E遺跡』

スライド95

福井市林・藤島遺跡のL字形石杵

- 福井市泉田町域内に位置する弥生時代中～後期の集落跡であり、後期には大規模な玉製作と大量の鉄製品を持つ。
- 1は、東地区S106（法仏式）から出土。L字形で前面mは方形。平坦な表面は長軸方向に緩やかな弧を描く。下面を中心に赤色顔料付着するが、磨面には認められない。長さ105mm、幅62mm、厚さ95mm、重量800gで珉島岡安山岩製。
- 2は、西地区S145（法仏式）から出土。L字形で前面は円形で、後面は平滑。全体を細かい線打で整形。磨面が確認される。長さ174mm、幅137mm、幅80mm、重量1835gで砂岩製。

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『林・藤島遺跡調査報告書』

スライド96

山陰系甌の北陸での分布

かつて、山陰系甌と呼ばれた土器があり、現在は前半島を起源とする土製産物とされている。

北陸地方では、弥生時代後期後半～古墳時代前期のものが、志賀町内（旧富来町・志賀町）で4遺跡5個体、白山市内（旧松任市）1個体、小松市内で4遺跡4個体が確認されています。

▲ 家住 2010 『三国・古墳時代における土製産物研究』『立命館大学考古学論集Ⅴ』

▲ 鳥取県出土品目録『丹波川流域伊賀田遺跡』2017『古代山陰と伊賀田』

国土地理院地図

スライド97

志賀町（旧富来町）出土の山陰系甌

- 1、2は、旧富来町志賀地区内の砥石段上に立地する弥生時代後期後半～末を主体とする遺跡から出土。1は後期後半の遺跡の下層から出土し、口径10.2cm、残存高約26cmであり、口縁部破片と縁の把手が出土した。1は包含層土（後期後半～後期末）であり、口径8cmである。
- 3～5は、旧富来町八幡地区内の八幡「ウモンガ力遺跡」から出土。今回の見直しにより把手付き甌ではなく、山陰系甌と認定した。1は口径30.0cm、5は8区地区包含層から出土。また、6は山陰系注口である。

▲ 高来町教育委員会 1989 『高来町史』

▲ 高来町教育委員会 2000 『高来町誌』

スライド98

志賀町穴口遺跡の山陰系甌

志賀町穴口地区内の旧籠野川の畔に立地する弥生～古墳時代を主体とする遺跡である。A区群出土であり、弥生時代中期～後期の土器が確認され、後期の土器が主体と思われる。口径12.6cm、残存高約21cmであり、把手付近には縦刻文がある。

1は、旧志賀町教育委員会（昭和29年10月志加浦・堀松・加茂・後上・上野野村が合併、昭和30年4月7日旧志賀町）の発掘として出土されたものであったが、今年山陰系甌と認定した。土器部径約11cmで、1の縦刻文が少し下った位置に2セットある。

▲ 志賀町史 1974 『志賀町町史資料編第一巻』

石川県教育委員会・財団法人山陰文化財センター 2004 『穴口遺跡・穴口群』

スライド99

加賀地方の山陰系甌

- 加賀地方では、白山市内では13遺跡、小松市内では4遺跡で確認されている。
- 白山（旧松任）一帯一子ツツカ遺跡では、四隅突出墳丘墓の付近から、両溝を持つ建物から、突縁部分が新発見された。
- 小松市西野地町山王遺跡では、塚部として山陰系甌（7、写真右上）が出土。
- 小松市千代・能美地区内の千代・能美遺跡で小型の山陰系甌が出土した。9は、口径7.5cm、残存高3cm、高さ18.2cmで縁の把手が剥離、内面上部から外面に厚付層。

▲ 松任中野教育委員会 1995 『松任町誌』

▲ 小松市史 1995 『小松市史』

▲ 石川県教育委員会・財団法人山陰文化財センター 2012 『千代・能美地区』

スライド100

小松市念仏林南遺跡の山陰系甌

- 小松市月津町内の標高約9mの月津台地に立地する。
- 11号住居跡（縄文台形4.72×4.4）月影1式の竪穴であり、床面から山陰系甌が出土した。口径14.7cm、突縁径23.4cm、残存高約48cmであり、縁の付着等は見られない。
- 床面からは、被熱を受けた砥石などが確認されている。

▲ 小松市教育委員会 1994 『念仏林南遺跡』

スライド101

小松市八里向山A遺跡S101出土の山陰系甌

- 小松市八里町地区の標高約49mの丘陵上に立地する。
- 遺跡内で最大の楕円形の竪穴住居で13.2×11.2mである。丹影1式の竪穴であり、2部の建て替え材層が認められる。山陰系甌は最終面の床面出土である。
- 1は、口径12.6cm、突縁径17cm、残存高46.3cmであり、把手の高さは不明である。縁の付着などは不明という。
- 袋状鉄製（2、朝鮮半島産か）と棒状鉄製品が3点出土。2は長さ14.85cm、刃部幅0.52cm、刃部厚1.05cm、総重2.2×2.20cm、袋部厚0.4cm、重量7.62gである。

▲ 小松市教育委員会 2004 『八里向山遺跡』

▲ 大塚 2007 『大塚』

▲ 財団法人山陰文化財センター

スライド102

九州型石錘

- 北部九州の玄界灘沿岸に主体的に存在する石錘であり、平面が分銅形や紡錘型で、沈線や穿孔により裝飾する石錘針で、大ききや形が特殊に（J）エーションに属する。
- 時期は弥生時代中期～古墳時代後期まで確認される。

▲ 福岡県糸島市助塚松原遺跡 大塚 2007 『大塚』

▲ 林好子・中尾 2014 『九州型石錘の形成と変遷』 『研究紀要第4号』長崎県立文化財センター

スライド103

九州型石錘の分布

大塚 2007 『大塚』

▲ 新野市立遺跡：弥生中層～古墳前期

▲ 福岡県教育委員会 2009 『大塚』

▲ 伊豆国歴史博物館 2007 『倭人の海』

▲ 北陸地方の九州型石錘など、弥生時代～古墳前期 国土地理院地図

スライド104

北陸地方の九州型石錘など

北陸地方の九州型石錘などは、石川県4遺跡、富山県1遺跡を確認し、滑石製は1点で凝灰岩と思われる。

能登地方では、志賀町小室キダ遺跡(1)、福井ナカミチ遺跡(2)、中能登町小竹平遺跡(3)で確認。

加賀地方では、金沢市畝田・寺中遺跡(4)や石川、小松市平面柳川遺跡(5)で土器1点を確認。

富山県では、射水市荒畑遺跡(6)富山県射水市(旧新湊市・大島町)の縄文時代～中世の複合遺跡であり、中世の遺物と出土したようである。6は、滑石凝灰岩とされている。

スズキ 1992 『北陸中部に展開する九州型石錘』『大塚第14号』富山考古学会

スライド105

能登地方の九州型石錘

東小室キダ遺跡は、志賀町(旧高来町)東小室地内の平野部に立地。1は残存長122mm、幅46mm、厚さ51mm、重量315.7gである。穿孔は両側から。

福井ナカミチ遺跡は、志賀町福井・福野地内の日蓮野部の畑畔に立地。2は5 X 31(川)からの出土。残存長10cm、幅2cm、厚さ4.2cm、重量424.3g、石材は粗い砂粒を含む凝灰岩であろう。

小竹平遺跡は、中能登町(旧鹿島町)小竹地内の石動山の麓部に立地。3は長さ20.2cm、直径6.5cm、重さ110gの砂岩質という。損傷と思われる土器が2点出土。Aは口径約15cm、残存高9cm、孔径2mmの植物型の土器で残存高20.6cm、幅14.6cmである。

石川県立歴史博物館 1998 『東小室キダ遺跡』
石川県教育委員会・(公財)石川県歴史文化センター 2017 『福井ナカミチ遺跡』
富山県教育委員会 1985 『小竹カラボ』
富山県歴史文化センター 2017 『福井ナカミチ遺跡』

スライド106

加賀地方の九州型石錘など

金沢市畝田・寺中遺跡では古墳時代前期として2点報告された。

S102は残存長93mm、幅68mm、厚さ52mm、重量432gで凝灰岩山岩とされている。

S103は長さ92mm、幅42mm、厚さ38mm、重量203gで凝灰岩とされたが、滑石製である。

2009年小松市平面柳川遺跡出土であり、弥生時代後期前半～後半と厚われる。山形型磨石や注口も出土している。柳川遺跡の土器であり、柳川遺跡の遺物と出土したようである。長さ7.9cm、幅3.6cm、厚さ3cm、重量●gである。

石川県教育委員会・(財)石川県歴史文化センター 2006 『畝田遺跡発掘』
(財)石川県歴史文化センター 2000 『平面柳川遺跡発掘』

スライド107

金沢市畝田・寺中遺跡の石錘群+新潟県

金沢市の新西地区に位置する畝田・寺中遺跡などは縄文～中世の遺跡である。弥生時代中期～土器時代前期の石錘が10点報告されている。その中で、九州型石錘が2点報告された。他は凝石1点、奥平内型石錘3点、中部型石錘6点、切目石錘1点がある。

石川県教育委員会・(財)石川県歴史文化センター 2006 『畝田遺跡発掘』

新潟県立遺跡、五千石遺跡の石錘は？

黒川 1998 『新編石川県史』
1 原始・古代・中世
長岡市教育委員会 2011 『五千石遺跡』

スライド108

白江梯川遺跡の船関係部材

スライド109

いしかわの船

弥生時代の船の築港地と外東家土器の出土地

上越市上遺跡 船中河津遺跡

早稲船の部材

金沢市金沢・開新倉遺跡の弥生時代中期～土器時代前期(弥生時代後期)

小松市千代・能登遺跡の山形(古墳時代前期)長さ104.7cm、幅約10cmと厚み約1cmの板を持つ

三日月が瓦波

大塚町立弥生文化博物館 2013 『弥生人の船 モンゴロイドの海の世界』
新潟県立歴史博物館 2018 『弥生時代のいしかわ 時代がかわるとき』

スライド110

図・写真の出典

- スライド2：石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター2019『相坂遺跡・相神東シンカイ遺跡』に加筆
- スライド3：大阪府立弥生文化博物館2015『海をみつめた縄文人』
- スライド4：石川県埋蔵文化財センターの写真
- スライド5：筆者撮影など
- スライド6：能都町教育委員会1986『真脇遺跡』、国立歴史民俗博物館2001『縄文文化の扉を開く』に加筆
- スライド7：国立歴史民俗博物館2000『北の島の縄文人』、福岡市博物館1995『縄文時代展』
- スライド8：大阪府立弥生文化博物館1998『卑弥呼の宝石箱』『縄紋の祈り・弥生の心』、東海大学出版会2000『日本近海産貝類図鑑』、福岡市博物館1995『縄文時代展』、国立歴史民俗博物館2001『縄文文化の扉を開く』
- スライド9：中四国縄文研究会2018『中四国地方の外來系土器』、和歌山市立博物館 2010『よみがえる和歌山の縄文世界』から掲載など
- スライド10：至文堂1997『日本の美術 第369号縄文時代の装身具』、大坪志子2007『九州地方の石製装身具』『石川県埋蔵文化財情報第17号』(財)石川県埋蔵文化財センター、大坪志子・森 康2011『縄文時代後晩期における九州産石製装身具の波及』『日本考古学協会第77回総会』、大坪志子2019『九州における弥生勾玉の系譜』『考古学研究261号』考古学研究会、福井県立博物館2004『北陸の玉』から掲載など
- スライド11：大阪府立弥生文化博物館1998『縄紋の祈り・弥生の心』に加筆
- スライド12：大阪府立弥生文化博物館1998『縄紋の祈り・弥生の心』に加筆など
- スライド13：小矢部市教育委員会2007『桜町遺跡』、金沢市埋蔵文化財センター2010『中屋サワ遺跡』
- スライド15：中郷村教育委員会2004『奥の城西峯遺跡』から掲載
- スライド16：小学館1990『日本列島大地図鑑』、設楽博己・小林青樹2007『板付I式土器成立期における遠賀川系土器の関与』『縄文時代から弥生時代へ』雄山閣をもとに作成など
- スライド17：宮里 修2018『晩期東日本系土器の四国・瀬戸内地方への波及』『中四国地方の外來系土器』中四国縄文研究会、石川日出志2000『突帯文期・遠賀川期の東日本系土器』『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会から掲載
- スライド18：小林青樹2000『東日本系土器からみた縄文・弥生広域交流序論』『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
- スライド19：野々市町教育委員会1983『御経塚遺跡』・1989『御経塚遺跡II』・2003『御経塚遺跡III』・2009『御経塚遺跡IV』から掲載
- スライド20：松任市教育委員会2003『倉光館跡遺跡・宮永雁堀遺跡II・宮永はじ川遺跡IV・安田三郎惟光館跡遺跡』、富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事業団2006『下老子笹川遺跡』から掲載、左端写真は石川県埋蔵文化財センターで撮影
- スライド21：野々市町2006『野々市町史 通史編』
- スライド22：小学館1990『日本列島大地図鑑』を使用
- スライド23：設楽博己2004『遠賀川系土器における浮線文土器の影響』『島根考古学会誌第20・21集合併号』島根考古学会を元に作成、伊都国歴史博物館2017『古代出雲と伊都国』、小松市教育委員会2006『八日市地方遺跡～地中から今、弥生時代が甦る』
- スライド24：大阪府立弥生文化博物館2013『弥生人の船』、石川県立郷土資料館1978『舩倉島シラスナ遺跡』、輪島市教育委員会1985『舩倉島・七ツ島(大島)』から掲載
- スライド25：久田正弘2016『弥生時代における土器の移動について』『石川県埋蔵文化財情報第36号』(公財)石川県埋蔵文化財センターから掲載
- スライド26：小学館1990『日本列島大地図鑑』を使用
- スライド27：佐藤由紀男・宮田 明2018『石川県小松市八日市地方遺跡出土の層灰岩製片刃石斧と三面石斧をめぐって』『考古学研究259号』考古学研究会から掲載
- スライド28：七尾市教育委員会1985『七尾市赤浦遺跡』、石川県歴史博物館2008『弥生ムラの風景』から掲載
- スライド29：石川県歴史博物館2008『弥生ムラの風景』、伊都国歴史博物館2017『古代出雲と伊都国』から掲載、他は筆者撮影など
- スライド30：久田正弘2016『弥生時代における土器の移動について』『石川県埋蔵文化財情報第36号』(公財)石川県埋蔵文化財センターから作成
- スライド31：黒埜町1998『黒埜町史資料編1 原始・古代・中世』から掲載
- スライド32：久田正弘2016『弥生時代における土器の移動について』『石川県埋蔵文化財情報第36号』(公財)石川県埋蔵文化財センターから作成
- スライド33：小松市教育委員会2015『小松発・北陸新幹線ルートの弥生文化を探る』の検討資料から掲載
- スライド34・35：上越市教育委員会2006『吹上遺跡』から掲載
- スライド36：久田正弘2009『弥生時代の東日本系土器集成』『石川考古学研究会々誌第52号』石川考古学研究会に加筆
- スライド37：七尾市教育委員会1982『細口源田山遺跡』、七尾市役所2014『図説 七尾の歴史』から掲載
- スライド38：(公財)石川県埋蔵文化財センター2013『石川県埋蔵文化財情報第30号』から掲載など
- スライド39：富来町教育委員会1994『山王丸山遺跡』・1999『高田遺跡』・2000『富来城跡』、佐渡市教育委員会2017『蔵王遺跡・小谷地遺跡・平田遺跡』、上越市教育委員会2006『吹上遺跡』から掲載など
- スライド40：志賀町教育委員会1994『山王丸山遺跡』から掲載
- スライド41：志賀町教育委員会2000『富来城跡』から掲載
- スライド42：石川県立埋蔵文化財センター1987・1988『吉崎・次場遺跡』、羽咋市教育委員会2000『吉崎・次場遺跡第17次』、小松市教育委員会2015『小松発・北陸新幹線ルートの弥生文化を探る』から掲載
- スライド43：石川県立埋蔵文化財センター1987・1988『吉崎・次場遺跡』、小松市教育委員会2015『小松発・北陸新幹線ルートの弥生文化を探る』から掲載、上段は筆者撮影
- スライド44：石川県立埋蔵文化財センター1988『吉崎・次場遺跡』から掲載、右側は石川県埋蔵文化財センターの写真
- スライド45：林大智2009『北陸における弥生時代の生産と流通』『中部の弥生時代研究』中部の弥生時代研究会刊行委員会を元に作成、写真は石川県埋蔵文化財センターで撮影
- スライド46：林大智2009『北陸における弥生時代の生産と流通』『中部の弥生時代研究』中部の弥生時代研究会刊行委員会を元に作成、写真は石川県埋蔵文化財センターで撮影と筆者撮影
- スライド47：石川県立埋蔵文化財センター1987『吉崎・次場遺跡資料編1』、小松市教育委員会1987『八日市地方遺跡II』から掲載、カラー写真は石川県埋蔵文化財センターで撮影
- スライド48：久田正弘2018『能登・加賀地方の中期社会と交流』『弥生時代の地域社会と交流～転機8号』地域と考古学の会を一部改変
- スライド49：左端の写真は小松市教育委員会 2006『八日市地方遺跡～地中から今、弥生時代が甦る』から掲載、他は石川県埋蔵文化財センターで撮影
- スライド50：大阪府立弥生文化博物館2005『北陸の玉と鉄』、愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター・愛知県陶磁資料館2006『発掘されたムラと宝 いにしへの暮らしと技を探る』から掲載
- スライド51：石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター2019『八日市地方遺跡』から掲載、石川県埋蔵文化財センターの写真
- スライド52：石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター2019『八日市地方遺跡』から掲載
- スライド53：大阪府立弥生文化博物館2005『北陸の玉と鉄』、富来町教育委員会1999『高田遺跡』、石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター2019『八日市地方遺跡』、林 大智1999『吉崎・次場遺跡の板状鉄斧について』『石川県埋蔵文化財情報第2号』(財)石川県埋蔵文化財センターから掲載
- スライド54：石川県埋蔵文化財センターの写真
- スライド55：大阪府立弥生文化博物館 2000『神々の源流～出雲・石見・隠岐の弥生文化』、鳥取県埋蔵文化財センター2006『稲作とくらし』、石川県立歴史博物館2008『弥生ムラの風景』から掲載
- スライド56：林 大智・河合 忍1999『弥生時代中期の複合口縁甕について』『石川県埋蔵文化財情報第2号』(財)石川県埋蔵文化財センター、石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2009『三木A遺跡』、石川県立埋蔵文化財センター1985『北安江遺跡』、新潟県立歴史博物館2013『弥生時代のいにがた 時代がかわるとき』から掲載

スライド57：石川県立埋蔵文化財センター1987・1988『吉崎・次場遺跡』、小矢部市教育委員会2005『平成16年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概要』から掲載

スライド58：小松市教育委員会2003『八日市地方遺跡Ⅰ』・2006『県文化財指定記念特別展 八日市地方遺跡』から掲載

スライド59：石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2004『八日市地方遺跡』から掲載、写真は石川県埋蔵文化財センターで撮影

スライド60：久田正弘2006『北陸地方の絵画資料』『原始絵画の研究 論考編』六一書房から掲載

スライド61：小松市教育委員会2008『八日市地方遺跡Ⅲ』・2016『八日市地方遺跡Ⅱ』、石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター2019『八日市地方遺跡概要報告』から掲載、大阪府立弥生文化博物館2000『神々の源流―出雲・石見・隠岐の弥生文化』に加筆

スライド62：石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2004『戸水B遺跡(10・12・13次)』、大阪府立弥生文化博物館1998『卑弥呼の宝石箱』・2001『弥生クロスロード―再考・信濃の農耕社会』から掲載

スライド63：大阪府立弥生文化博物館2001『弥生クロスロード―再考・信濃の農耕社会』、久田正弘2018『能登・加賀地方の中期社会と交流』『弥生時代の地域社会と交流―転機8号』地域と考古学の会から掲載

スライド64：久田正弘2002『弥生時代の東日本系土器集成』『石川考古学研究会々誌第52号』石川考古学研究会に加筆、石川県立埋蔵文化財センター1998『中相川遺跡』、富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2006『下老子笹川遺跡』、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2008『持明寺遺跡』、(公財)石川県埋蔵文化財センター2019『石川県埋蔵文化財情報第41号』から掲載

スライド65：石川考古学研究会1977『鳥屋・高階古墳群分布調査報告』『石川考古学研究会々誌第20号』石川考古学研究会、谷内尾晋司1982『北陸地方の墓制』『西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題』埋蔵文化財研究会から掲載

スライド66：久田正弘2003『弥生時代における影響関係について』『石川県埋蔵文化財情報第9号』(財)石川県埋蔵文化財センター、石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2004『東的場タケノハナ遺跡』、松任市教育委員会2008『野本遺跡』、石川県立歴史博物館2008『弥生ムラの風景』、氷見市役所2002『氷見市史7資料編五考古編』から掲載

スライド67：大阪府立弥生文化博物館2005『北陸の玉と鉄』、石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002『一針B遺跡・一針C遺跡』から掲載など

スライド68：左端の写真は羽咋市教育委員会提供、石川県立歴史博物館2008『弥生ムラの風景』、石川県立埋蔵文化財センター1987・1988『吉崎・次場遺跡』、林 大智2000『羽咋市吉崎・次場遺跡出土の土製鋳型外枠について』『石川県埋蔵文化財情報第3号』石川県埋蔵文化財センター、あわら市教育委員会2007『南稲越遺跡』から掲載

スライド69：久田正弘2014『木製品の木取りと割付けについて』『石川県埋蔵文化財情報第32号』(財)石川県埋蔵文化財センターを元にして作成

スライド70：鳥取県埋蔵文化財センター2012『海を渡った鏡と鉄』・2013『日本海を行き交う弥生の宝石』から掲載

スライド71：鳥取県埋蔵文化財センター2008『弥生の至宝～花弁高杯とその背景』から掲載

スライド72：金沢市教育委員会1996『西念・南新保遺跡Ⅳ』から掲載と筆者撮影

スライド73：鳥取県埋蔵文化財センター2008『弥生の至宝～花弁高杯とその背景』から掲載と石川県埋蔵文化財センターの写真

スライド74：石川県埋蔵文化財センターの写真

スライド75：鳥取県埋蔵文化財センター2005『木製容器・かご』から掲載と石川県埋蔵文化財センターの写真

スライド76：鳥取県埋蔵文化財センター2006『稲作とくらしー鳥取県の考古学第2巻』、福井県教育庁埋蔵文化財センター2001『第16回福井県発掘調査報告会ー平成12年度に発掘された遺跡』から掲載

スライド77：新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団2014『大武遺跡Ⅱ』から掲載

スライド78：(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2010『惣領浦之前遺跡・惣領野際遺跡』から掲載

スライド79：鳥取県埋蔵文化財センター2005『木製容器・かご』、新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団2014『大武遺跡Ⅱ』、上越市教育委員会2008『釜蓋遺跡範囲確認調査報告書』から掲載、石川県埋蔵文化財センターの写真

スライド80：鳥根県教育委員会2009『倭と韓』、大阪府立弥生文化博物館2007『稲作とともに伝わった武器』、新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団2014『大武遺跡Ⅱ』から掲載、石川県埋蔵文化財センターの写真

スライド81：鳥取県埋蔵文化財センター2013『緑土塗布の木製盾復元製作』から掲載、石川県埋蔵文化財センターの写真

スライド82：石川県埋蔵文化財センターの写真

スライド83：樋上 昇2019『北陸型木製品の展開と地域間交流～工具の問題も含めて』『北陸の弥生世界～わざとこころ』大阪府立弥生文化博物館、新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団2014『大武遺跡Ⅱ』から掲載

スライド84：石川県立埋蔵文化財センター1982『漆町遺跡』から掲載、長者ヶ原考古館の展示

スライド85：七尾市教育委員会1998『奥原峠遺跡』、七尾市役所2014『図説七尾の歴史』、石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2002『一針B遺跡・一針C遺跡』から掲載

スライド86～89：村上市教育委員会2013『山元遺跡』から掲載

スライド89：下側は富山県教育委員会2006『向野池遺跡』から掲載

スライド90：大阪府立弥生文化博物館2000『神々の源流―出雲・石見・隠岐の弥生文化』に加筆、福井市教育委員会2011『高柳遺跡』、七野古墳発掘調査会2010『七野墳墓群』から掲載

スライド91：七野古墳発掘調査会2010『七野墳墓群』から掲載

スライド92：福井市教育委員会2011『高柳遺跡』から掲載

スライド93：石井智大2009『弥生時代L字状石柁の歴史的意義』『古代第122号』早稲田大学考古学会に加筆

スライド94：中屋克彦2011『万行遺跡と謎の巨大建物』『図説能登の歴史』郷土出版社、七尾市役所2014『図説七尾の歴史』から掲載

スライド95：左側は筆者撮影、石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2008『小島遺跡』から掲載と石川県埋蔵文化財センターの写真

スライド96：金沢市埋蔵文化財センター2016『大友E遺跡』から掲載と筆者撮影

スライド97：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2009『林・藤島遺跡泉田地区』から撮影

スライド98：崔 榮柱2010『三国・古墳時代における土製煙筒研究』『立命館大学考古学論集V』に加筆、伊都国歴史館2017『古代出雲と伊都国』から掲載

スライド99：富来町教育委員会1989『鹿頭上の出遺跡』・2000『富来城跡』から掲載

スライド100：石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2004『穴口遺跡・穴口貝塚』、志賀町役場1974『志賀町町史資料編第一巻』から掲載

スライド101：松任市教育委員会1995『旭遺跡群』、石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2012『千代・能美遺跡』などから掲載、写真は小松市教育委員会提供

スライド102：小松市教育委員会1994『念仏林南遺跡Ⅰ』から掲載

スライド103：小松市教育委員会2004『八里向山遺跡群』から掲載

スライド104：大阪府立弥生文化博物館2017『海に生きた人びと』、林田好子・中尾篤志2014『九州型石鍾の集成と展望』『研究紀要第4号』長崎県埋蔵文化財センターから掲載

スライド105：伊都国歴史博物館2007『倭人の海道』、大阪府立弥生文化博物館2000『神々の源流』、鳥取県教育委員会2009『倭と韓』などから掲載

スライド106：石川県埋蔵文化財センターの写真、久々忠義1992『大島町荒畑遺跡の九州型石鍾』『大境第14号』富山考古学会などから掲載

スライド107：石川県立埋蔵文化財センター1998『東小室ボガヤチ遺跡・東小室キンダ遺跡』、石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター2017『福井ナカミ遺跡』、鹿島町教育委員会1985『小竹ガラボ山古墳・小竹平遺跡』から掲載

スライド108：石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター2006『畝田西遺跡群Ⅲ』、(財)石川県埋蔵文化財センター2000『平面梯川遺跡-第2・3次』から掲載、カラー写真は石川県埋蔵文化財センターの写真

スライド109：石川県埋蔵文化財センターの写真、黒崎町1998『黒崎町町史資料編1 原始・古代・中世』、長岡市教育委員会2011『五千石遺跡』から掲載

スライド110：大阪府立弥生文化博物館2013『弥生人の船 モンゴロイドの海洋世界』、新潟県立歴史博物館2013『弥生時代のいがた 時代がかわるとき』